

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十五課 うつくしい さらに なりました：
「なる」「する」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002794

基礎篇第十五課

うつくしい さらに なりました

——「なる」「する」——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第十五課「うつくしい さらに になりました」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたった者は、次のとおりである。

本文執筆 2.4. 佐久間勝彦（企画協議会委員・国際交流基金日本研究部日本語課）

1.3. 日向 茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

資料1., 資料2. 日向 茂男（ ” ” ）

昭和57年3月

国立国語研究所長

林 大

目 次

1. はじめに.....	1
2. この映画の目的・内容・構成.....	2
2.1. 目的・内容.....	2
2.2. 構成.....	5
2.2.1. 解説書における場面，表現の扱い.....	5
2.2.2. 映画の場面，表現形式.....	5
2.2.3. 場面，表現についての解説.....	6
3. この映画での学習項目の整理.....	43
3.1. 「なる」「する」.....	44
3.2. 自動詞・他動詞.....	53
3.3. 自動詞・他動詞の派生対応リスト.....	58
4. 練習問題.....	67
5. 参考文献.....	86
資料1. 使用語彙一覧.....	89
資料2. シナリオ全文.....	101

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画制作されたもので、この映画「うつくしい さらに になりました」は、その第十五課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは、次の通りである。

昭和50年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

池尾 スミ	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師
石田 敏子	国際基督教大学専任助手
今田 滋子	国際基督教大学助教授
川瀬 生郎	東京外国語大学附属日本語学校教授
木村 宗男	早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター助教授
佐久間勝彦	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師

日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

林 大	日本語教育部長・事務取扱
武田 祈	日本語教育部日本語教育研修室長
日向 茂男	〃 日本語教育研修室研究員
水谷 修	〃 日本語教育研究室長

この映画「うつくしい さらに になりました」は、池尾スミ、佐久間勝彦両委員の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同会社の前田直明氏があたり、同氏はまたこの映

画の演出を担当した。言語演出の面では、協議会委員及び日本語教育部（当時）関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、執筆には2., 4. は佐久間勝彦委員が、1., 3. は日向茂男があたった。また、資料1., 資料2. は、日向茂男が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作にあたっての意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理課
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画はそのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「うつくしい さらに になりました」の主要な目的は、事物・状態の変化を表す「なる」「する」を提示し、その意味・用法の理解をはかることである。

この映画は、基礎篇全30課中、第15課に位置づけられているが、制作順という点では初期のものである。このシリーズ（基礎篇）の制作が開始された当初は、作品ごとに題材、構成、映画としてのスタイルなどについて種々の試みがなされたが、この映画の場合も、他の多くの作品と異なる試みが二つほどある。それぞれのねらいについて簡単に述べておく。

1. 全体が、相互に関係のない三つの部分より構成されている。

それは、映画としての豊かなストーリー性よりは、「なる」「する」の意味・用法についての基本的な理解を与えるために効果的な場面を集中的に提示することに主たるねらいがあったからである。場面は、(1) 陶工の仕事場、(2) 都会の風景、(3) 学生寮の三つで、それぞれ(1) 色彩・形態の変化、(2) 自然現象、情景の変化、(3) 音（量）の変化を扱っている。

種類の違うこれだけの場面、それも教室に持ち込みにくい場面を「事物・状態の変化」という指導テーマで5分間にまとめて学習者に提出することはまさに映像教材だからこそできることといえよう。

2. 三つの部分のそれぞれに「れんしゅう」がつけられている。

これは、教室で行う練習に代わるものとして位置づけられるものではなく導入の一部として考えるべきである。すなわち、三部構成のそれぞれの部分の前半で提示される事項について、その理解を確認させることにねらいがある。

全体で5分間という長さの制約もあり、質問の後のポーズは反応するには不十分であるが、学習者が映画を見ながら自分の理解を確認するには有効だと思われる。ただ、教師は映画を見せるまえに、(1) 質問の後に十分な長さのポーズがないこと、(2) 正しい答は必ずしもひとつではないこと、などを学習者に伝えておくことが望ましい。

なお、この映画を映写機で見せる場合でもビデオで見せる場合でも、使用するのが一時停止装置付きの機械なら、教師は問の後で画面を静止させ、学習者にいろいろ答えさせることにより、きめ細かな指導をすることができよう。

サブタイトルには「なる」「する」とあるが、学習事項としてこの映画で扱う内容は、変化を表す表現形式に用いられる「なる」「する」に限られる。語法として提示されるのは、

- (1) 形容詞＋なる／する
- (2) 名詞＋に＋なる／する
- (3) 形容動詞＋なる／する
- (4) どう＋なる／する

までであり、「動詞＋（ように）＋なる／する」やそれぞれの否定の表現などは含まれていない。

「なる」「する」の文法的な問題一般については、後に「3. この映画での学習項目の整理」で扱うことになるが、自動詞「なる」、他動詞「する」についての理解が、動詞を学習するうえでひとつの大きな鍵となることを考えれば、この映画が、目的をしぼり、内容を「なる」「する」の基本的な語法にとどめたことは十分うなずかれよう。

たとえここで扱う事項は少なくとも、この「なる」「する」の意味・用法上の特徴をしっかりと身につけた場合、学習者はその後の学習のための確かな基礎を得たことになる。すなわち、(1) 自動詞・他動詞についての理解を深めることができ、(2) 変化を表す表現から出発して、決定を表す「名詞＋にする」、「__ことになる／する」、さらに「__ようになる／する」などへ進み、表現を豊かにすることができ、(3) 「なる」「する」を使った種々の表現、「気になる／気にする」、「ダメになる／ダメにする」、「無駄になる／無駄にする」、「問題になる／問題にする」、「話題になる／話題にする」、「苦になる／苦にする」、「何とかなる／何とかする」などを身につけることも容易になるであろう。

以上のようにみえてくると、「なる」「する」の基本的指導を目的としたこの映画は、補助教材として利用する場合には問題ないが、映画を中心にすえ、課を追っていく体系的な指導を考える場合には、基礎編30課中、第4課で動詞が導入された後、第11課で「__して、している、していた」、第12課で「__

してある、しておく、してしまう」などが扱われるのであるから、15課まで待たず10課以前に位置づけられたほうが、動詞を中心とした学習にとってより効果的であるように思われる。

2.2. 構成

2.2.1. 解説書における場面、表現の扱い

本解説書において、映画の場面や表現について例示する場合には、以下の通り扱うことにする。

1. この映画は、場面によって全体を大きく三部に分け、それぞれを、PART 1, PART 2, PART 3と呼ぶこととする。またその各PARTは、内容によって提示の部分(前半)と「れんしゅう」(後半)とに二分することができるので、それぞれの部分を示す場合、便宜上、PART 1—I, II, PART 2—Ⅲ, IV, PART 3—V, VIと表すこととする。そして、それぞれをさらに小さく分ける必要のあるときは、I—1, I—2, I—3…のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①, ②…のように通し番号をつける。この文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文で用いられるものと共通である。文を変形して示すときには、①', ②'…のように'の印をつけ、変形して示す文が二つ以上あるときには、'', '''のように'を重ねていく。
3. この映画の中に直接現れていない文や表現を例示するときには、[1], [2]…のように〔 〕付の番号をつけ、それを変形して示すときには、上記2の場合同様'印をつける。

2.2.2. 映画の場面、表現形式

すでに述べた通り、この映画は場面の異なる三つの素材より構成されている。それを整理すると以下のようになる。

	場 面			文 番 号
PART 1	陶工の仕事場 (皿ができるまで)	提 示	I	①～⑬
		練 習	II	⑭～⑳
PART 2	都会の風景 (夜明け前から夜まで)	提 示	III	㉑～㉓
		練 習	IV	㉔～㉖
PART 3	学生寮 (部屋が静かになるまで)	提 示	V	㉗～㉙
		練 習	VI	㉚～㉜

また、この映画の中心的指導項目である変化を表す表現に用いられる「なる」「する」を、語法について整理すると以下のようになる。

	場 面	現れる語形（接続の形）		変化するもの
		な る	す る	
PART 1	陶工の仕事場	形容詞＋なる 名詞＋に＋なる	形容詞＋する 名詞＋に＋する	物(体)の色, 形, 大きさ
PART 2	都会の風景	形容詞＋なる 名詞＋に＋なる どう＋なる		情景・自然現象
PART 3	学生寮	形容詞＋なる 形容動詞＋なる	形容詞＋する どう＋する	音の強弱

2.2.3. 場面、表現についての解説

I 皿ができるまで（PART 1）

映画は、男女二人がなだらかな勾配をゆっくり登っているところから始まる。次のシーンへいって、その場所が窯場付近であること、そしてその二人が窯場に向かっていた見学者であることがわかる。実はこの場所、笠間焼で有名な茨城県笠間市の、ある窯場である。

日本では有名な笠間焼だが、外国では、陶芸の研究家でもない限り知らない人が多いだろう。ちなみに、外国人に人気のある日本の焼物としては、鎌

倉時代からの備前(岡山), 信楽(滋賀), 桃山時代からの萩(山口), 唐津(佐賀, 長崎), 日本の磁器のはじまりである有田(佐賀)などがある。最近では, 素朴な味わいを持つ益子焼(栃木)が浜田庄司の名とともに広く知られるようになった。この映画のPART 1で紹介される笠間焼も, 益子に似た実用的で素朴な造りを主な特徴としている。

それでは, 以下, 笠間焼の皿が焼きあがるまでを, 三つの段階, すなわち

I-1 皿の形を作る(①~⑦)

I-2 乾燥させ, 焼く(⑧~⑪)

I-3 釉薬をかけ, 焼く(⑫~⑲)

に分けて, それぞれの言語場面, 言語表現上の問題点を検討しつつ見ていくことにする。

I-1 皿の形を作る(①~⑦)

この小場面では, 陶工がろくろを使って粘土の塊から皿の形を作るまでが紹介される。ここでの会話は以下の通りである。なお, A, B は見学者であり, Aが男性, Bが女性である。

A「①何を作っていますか。」

陶工「②皿です。」

(ろくろを回す手もと。変化していく粘土の塊)

陶工「③薄くします。」

④大きくします。」

B「⑤大きくなりますね。」

(皿の形が整う。出来栄えを見る陶工)

A「⑥薄くなりましたね。」

B「⑦皿になりましたね。」

場面は陶工の仕事場。陶工がろくろに向かって仕事をしている。立ってその様子を見ていた見学者の一人が尋ねる。

A「①何を作っていますか。」

あえて主語を補えば、「①' あなたは何を作っていますか。」となるが、ここでの例のように状況から明らかな場合、主語は省略されるのが普通であることをまず理解させたい。映像によって作られる場面は具体性があり、こうしたことを自然にわからせるのに好都合である。

しかし、正確には、状況からわかる主語を省略するというより、日本語は特別な意図のない限り文の構成要素として必ずしも主語を必要としない、というべきであり、この点は初級段階からはっきりさせておきたい。

また、「あなた」という語の用法に関連して、このような場面で「あなた」を使った場合、二人称をことさら強調することの不自然さもさることながら、質問が事務的、尋問的な調子となり、相手に冷たく、強く響くことがあるという別の問題にも触れておきたい。初級段階の学習者には、まず「あなた」という語より、相手の名前に「さん」（教師なら「先生」）を添えて二人称を表す言い方を身につけさせ、とくに目上の人に対しては「あなた」を避けるよう指導すべきであろう。少し話せるようになった学習者が、指導にあっている教師に向かって「あなたは、…」と質問するようなら、それは初級段階できちんとした指導を怠った教師の責任である。なお、この場面では、見学者が仕事上の陶工にものを尋ねるのだから、①の「何を作っていますか。」よりは

①' 何を作っているんですか。

のほうが表現として適切であることはいうまでもない。学習者に、この「のだ」を用いた表現形式に慣れさせることも、初級段階での指導課題のひとつといえよう。

見学者Aの質問「①何を作っていますか。」に対して、陶工は「②皿です。」と答えるのだが、ここで少し困ったことに、問①と答②の間に妙に長いポーズがあり、自然な会話としては多少間が抜けている。自然さという点で厳しくいえば、①の「何を作っていますか。」もイントネーションが曖昧であり、学習者に模倣させる練習のモデルなどには向かない音調になっている。登場人物の口もともはっきり動くようには作られていないので、映画のここでの

音声(サウンドトラック)は、普通の会話ではなく、会話の形式をとったある種のナレーションとでも考えたらよいのかもしれない。しかし、こうした微妙な点(教材の問題点)は、教師が指導にあたって一応心得ておけばよいことであり、学習者に教師のほうから持ち出すべきものではない。

陶工は、短く「②皿です。」と答えている。構文、文末の形の一致という意味で厳密に言えば、「①何を作っていますか。」の反応としては、

②' 皿を作っています。

が考えられるが、日常の言語生活では、②のように「です」を使って答えるほうが自然な場合が多い。

「です」を含む「②皿です」を、構文的に

②'' (私が作っているのは) 皿です。

と補って考えさせることもできるが、こういう機会に、名詞などに接続して、意味上動詞を含む述部に相当する働きをする助動詞「だ」の用法に注目させるのもよい。助動詞「だ」の“代動詞的”とでもいうべきこの用法は、現実の会話にきわめて頻繁に現れるので無視することはできない。以下は、応答としての例である。

〔1〕 私は、コーヒーです。(ヲ飲む、ヲ注文スルツモリダ、ガ飲ミタイ、ガ好キダ…)

〔2〕 私は、文学です。(ヲ専攻シテイル、ガ好キダ…)

〔3〕 私は、浅草です。(デ生マレタ、ニ住ンデイル、ヘ行クツモリダ、ガ好キダ…)

ただし、実用的な話し言葉をとくに短期間に身につけようとする学習者は便利さの故にこの用法の「だ」を乱用し、動詞を使わずに済ますことがあるので、注意を要する。十分な数の動詞の正しい用法を学ぼうと妨げになることがあるからである。

次の画面は、ろくろを回す手もとのアップ。とくに注意しなければ、すぐ前のシーンに連続しているように見える。

陶工「③薄くします。

④大きくします。」

これは、②の「皿です。」に続く陶工の説明である。

ここで、この映画の中心的指導課題である変化を表す表現形式が現れる。

③、④いずれにも、「なる」ではなく「する」が使われている。それは、話し手である陶工（動作主）が、自らコントロールできる変化（というより変化させること）について述べているからである。まず、この意味面でのポイントを押さえたうえで、語法について接続のしかたが「形容詞の連用形＋する」であることを十分確認させておきたい。

そして、変化を表す表現形式に「する」が使われる場合、その他動詞としての基本的な語法は、「AがBヲCスル」であり、そのA、B、Cの三要素が、

A：変化を起こさせるもの（陶工）

B：Aの働きを受けて変化するもの（粘土）

C：変化する方向（薄い、大きい）

であることをしっかり押さえるべきである。③、④について、その三要素をすべて含む形を考えれば、

私(陶工)が粘土ヲ $\left\{ \begin{array}{l} \text{薄く} \\ \text{大きく} \end{array} \right\}$ スル
(A) (B) (C)

となるが、ここでの話し手（陶工）の表現意図が“変化する方向”(C)にあるため、ただ「③薄くします。④大きくします。」という形で発話された、と説明することができよう。

上に見た陶工の説明③、④に続けて、女性の見学者が口を開く。

B「⑤大きくなりますね。」

ここでまた、変化を表す表現形式が用いられる。今度は、「する」でなく「なる」が使われている。

大切なことは、自動詞「なる」の基本的語法として「BがCナル」を確認させることである。Bは変化するもの（粘土の塊）、Cは変化する方向（大きい）である。ここでは、先の「する」の場合と違い、構文上、動作主（A）

がない。話者の眼中に、変化を起こさせる（動作）主体の存在がないからである。すなわち、変化するもの（B）が他から力を受けているかどうかは問題ではなく、起こっている変化そのものをただ眼前の事実として表すのが「なる」を用いたこの表現形式であることを確認させておきたい。このことは、PART 2 へいって自然現象や情景の変化について考えるとき、さらに明らかになる。

なお、終助詞「ね」を伴った「⑤大きくなりますね。」は、ろくろの上で見る見るうちに大きくなっていく皿を見ながら、見学者Bが見学者Aに向かって、

⑤' なるほど大きくなるものですね。

と多少驚きを込めて言っている台詞のように思われるが、すぐ前の陶工の説明（③、④）を受けて、

⑤'' おっしゃる通り本当に大きくなりますね。

と詠嘆的に陶工に語り返しているようにもとれる。いずれにせよ、映画の中の話し手（見学者B）の調子は中途半端であり、とくに文末のイントネーションが曖昧で、実は解釈が難しい。しかしこれも、初級の学習者に混乱を与える恐れがあるので指摘しないほうがよい。

画面いっぱい陶工の上半身が映る。形の整った皿の出来栄を眺めているのであろう、陶工は視線を下げて両手を広げている。画面の下に肝心の皿がはっきり映っていないのは残念である。

台詞のないまま画面が変わり、今度は形の整った皿が大きく映る。そして見学者の台詞。

A 「⑥薄くなりましたね。」

B 「⑦皿になりましたね。」

⑥の「薄くなりましたね。」は、すぐ前の「⑤大きくなりますね。」と同様、形態の変化を表す表現形式であり、接続面でも「形容詞＋なる」で、難しさはない。

ここでは、先の③、④、⑤が「__ます」の形を使っていたのに対して、⑥

⑦が「__ました」の形をとり、変化の結果を“確認”する表現となっている点に注意させたい。

意味の上で、⑦が⑥と異なる点は、⑥の「薄くなりましたね。」が「どう変化したか」、つまり変化のしたかたを問題にしているのに対し、⑦の「皿になりましたね。」は、「(変化して) 何になったか」つまり変化の“結果”もしくは“到達点”を問題にしていることである。基本的には「医者になった」「教師になった」などの用法と同じものである点を確認させておきたい。

また、語法的には、この⑦ではじめて名詞に接続する「なる」が紹介されるわけであるから、ここでは、先にみた「BがCナル」の構文(p. 10)で、変化の方向、結果を示す要素Cに名詞が立つ場合、その形式は「名詞+に+なる」となることを押さえておく必要がある。形容詞の場合が連用形接続で「__くなる」であることに対比させ、接続上の相違を明確にしておくことは後に形容動詞を扱うときのためにも重要である。

なお、映画のサウンドトラックの「⑦皿になりましたね。」は、イントネーション、とくに文末の音調が中途半端なので、模倣練習のモデルとするには必ずしも適当ではない。

1-2 乾燥させ、焼く(⑧~⑪)

この小場面では、形の整った皿を、陶工が乾燥させ、窯に入れて焼くところまでが紹介されている。ここでの会話は以下の通りである。

(皿を乾燥場に入れる)

陶工「⑧乾かします。」

(器を運んで来て、窯に入れる)

陶工「⑨窯に入れます。」

(窯の中、炎)

陶工「⑩焼きます。」

(焼きあがった皿を指で弾く)

A「⑪ずいぶん固くなりましたね。」

⑧, ⑨, ⑩は、陶工のナレーションである。厳密に言えば、陶工が仕事をしながら説明しているという作りではないようである。陶工が、仕事の工程をフィルムに納め、それを眺めながら解説しているという形である。

また、文法的には、⑧, ⑨, ⑩のすべてに他動詞（「乾かす」「入れる」「焼く」）が使われているが、「誰ガ」と「何ヲ」は表現されていない。具体的な映像があるために、自然に意味をとることのできる学習者も少なくないと思うが、それぞれの動詞の基本的な語法は、それに対応する自動詞「乾く」「入る」「焼ける」の語法とともに十分確認しておく必要がある。

画面は、器がたくさん並ぶ乾燥場。そこへ、先に作ったものと思われる皿が差し入れられる。そして陶工のナレーション。

陶工「⑧乾かします。」

まず、他動詞「乾かす」の基本的な用法として

⑧' 私（陶工）ガ皿ヲ乾かす。

を確認したうえで、ここでは話し手（陶工）が、行為（作業）そのものに焦点を当てて説明しているために、「私」や「皿」が表面に現れてこない点に注意させたい。また、こんな場合に、主語や目的語を表面に出すことは、強調になり、発話に特別な意味を与えることになることも理解させておきたい。

上で、⑧の基底にある文の主語（動作主）を「私（陶工）」としたが、実は、本当にそうなのかどうか映画ではわからない。そういう疑問を持つことが当然であることは、次の画面で明らかになる。器を板に載せて運んでくる陶工も、それを受け取って窯に入れる陶工も、われわれが先に見た、ナレーターをしている陶工とは明らかに違うからである。

そこで陶工の解説。

陶工「⑨窯に入れます。」

ここでも他動詞「入れる」の用法を確認する必要がある。「AガBヲCに入れる」の三要素中、Aの「陶工」と、Bの「皿」は表面に現れていない。このへんが、映像なしの一般の初級教科書の会話文（本文）と大きく異なるところかもしれない。したがって、一定の場面を持った会話の流れの中で、話

し手がどんな表現意図、内容を持ち、それをどんな形で表現するのが自然なのかを、映画の場面に即して具体的に確認させるような指導が工夫されるべきであろう。

突然、画面いっぱいに炎。皿がオーバーラップして、それが窯の中であることが象徴的に示される。その後すぐ、中の炎が見える窯の外観を映す画面が心持ち長く続き、ゆっくりと時間をかけて皿を焼いていることが暗示される。ここでは、陶工の次のような解説がはいる。

陶工「⑩焼きます。」

ここでは、⑧、⑨同様、他動詞の語法として、

⑩' 陶工が皿を焼きます。

が基本であることを確認させたい。

以上⑧、⑨、⑩とみてきた他動詞の用法は、確認の意味も含めて、別に練習する必要があるが、映画利用ということでせっかく具体的な場面が映像で示されているのだから、以下のような質問をすることによって学習者が十分に理解しているかどうかを確認することは有益であろう。

たとえば、ここでの陶工（学習者に対しては「男の人」でよい）の台詞「⑧乾かします。」について、

〔４〕 何を乾かすのですか。

〔５〕 誰が乾かすのですか。

また、「⑨窯に入れます。」については、

〔６〕 どこに入れるのですか。

〔７〕 何を入れるのですか。

〔８〕 誰が入れるのですか。

などである。

なお、ここでは「のだ」の形を用いた質問例を示したが、この種の「のだ」が導入されていない学習者には、それを使わずに、

〔４〕' 何を乾かしますか。

などと聞いてもよい。質問としての自然さを多少欠くことはあっても、ここ

での指導目標の達成にマイナスの影響を与えることはあるまい。

画面いっぱいに焼きあがった皿が映る。画面左上に手が現れ、指で皿を弾く。澄んだ高い音がする。

A「⑪ずいぶん固くなりましたね。」

シナリオでは、硬度をみるために見学者Aが皿を弾いたことになっているが、画面の上でそれがはっきりしているわけではない。

ここでは、⑤の「大きくなりますね。」や、⑥の「薄くなりましたね。」と同様話者（見学者）が、主体（皿）の変化そのものに焦点を当てて表現している点に注意させておきたい。

ただし、⑤や⑥が、「③薄くします。」「④大きくします。」に対応する形式であると考えていいのに対し、⑪からすぐ、

⑪' ずいぶん固くしましたね。

を引き出すわけにはいかない。

それはこの場合、皿を変化させる動作主体は炎の熱であり、陶工でさえ直接にはその変化に関与する力が弱いと考えられるからにはかならない。

「この場合」というのは、「固い」という形容詞が、⑤、⑥の「大きい」「薄い」と異なっているからではなく、あくまでも与えられた場面の事実関係によるものだからである。同じ形容詞「固い」でも、その「固さ」を人間が直接調節できるような場合、たとえばクッキーを焼くときのドー（生練り粉）、てんぷらを作るときの衣、塑像を造るときの粘土などを話題にするときなら、「固くする」が成り立つことはいうまでもない。

1-3 ^{うわぐすり}釉薬をかけ、焼く（⑫～⑬）

この小場面では、焼きあがった皿に釉薬をかけ、もう一度窯に入れて焼き、皿が完成するまでを扱う。ここでの会話は以下の通りである。

（陶工が皿を釉薬液につける）

B「⑫どんな色にしますか。」

陶工「⑬黒にします。」

ひしゃく
(柄杓で釉薬をかける)

陶工「⑭ことここは、青くします。」

B「⑮こんな色が、黒や青になりますか。」

陶工「⑯ええ、なりますよ。」

(窯入れを象徴する炎)

陶工「⑰これをもう一度、窯に入れます。」

(焼きあがった皿)

B「⑱美しい皿になりましたね。」

A「⑲いい色になりましたね。」

画面は、陶工が焼きあがった皿を手に持ち、それを濃いレンガ色の釉薬液に浸すところである。そこで見学者が尋ねる。

B「⑳どんな色にしますか。」

陶工「㉑黒にします。」

見学者の質問⑳は、陶工が(釉薬液に浸して)これから、それをどんな色にする(変える)のかを聞いているのであるから、それに対する陶工の答「㉑黒にします」は、「黒い色にする(変える)」という意味であろう。

ただし、映画のような場面なしに㉑、㉑のやりとりを考える場合には、“変化”を表すというよりは、(対象・目標・到達点・結果などについての)“決定”や“選択”に主眼を置く表現形式としてとらえるのが普通であろう。先へいって学習する「__ことにする」なども、この延長上にある表現形式である。

〔9〕(妻)「何にするの。ビール？ お酒？」

〔10〕(夫)「そうねえ。酒にするかな。君は？」

〔11〕(妻)「わたし、今晚は飲まないことにするわ。」

なお、映画の音声についてだが、㉑の「どんな色にしますか」は、イントネーションに難がある。とくに文末の「か」は、曖昧で無表情に感じられる。

画面はかわり、濃いレンガ色の釉薬をかけたばかりの皿に、陶工が、今度は柄杓で黒っぽい釉薬をかける。次の陶工の台詞は、二筋かける箇所を示し

ながらする説明である。

陶工「⑭ことここは青くします。」

先に、Ⅰ-②のところでは、このナレーションは陶工がフィルムを見ながら解説しているような作りだと述べたが、「ことここ」という話者に引きつけた表現からは、陶工が実際に仕事をしながら解説をしているような雰囲気を感じとれる。

ここで、少し注意しておくことがある。同じ陶工が、ほとんどひと続きの台詞として、⑬で「黒にします。」と言い、⑭で「青くします。」と言っているのである。学習者が疑問に思わなければ触れないというのもひとつの方法だが、やはり避けて通るわけにはいくまい。

形態面では、「黒」-「黒い」、「青」-「青い」の名詞、形容詞の違いであるという簡単な説明で済ますこともできよう。接続について、名詞の場合は、名詞+「に」+「する」で「黒にする」となり、形容詞の場合は、「く」の形+「する」で「青くする」となることを確認させる。これが語法上の基本である。なお、初級の学習者にとって、「連用形」というような用語そのものは必ずしも必要ではない。

次に意味面だが、「黒にする」と「黒くする」について考えてみる。「黒くする」が一義的に“変化”つまり「無色→黒」、もしくは「黒以外のある色→黒」の“変化”(方向)を表すのに対し、「黒にする」のほうは、「黒くする」と同じような意味で使われることもなくはないが、既にある黒以外の色を取り除いて黒を入れる、つまり“交換”するような場合、あるいは“変化”に関係なく多くの色の中から黒を“選択”したり、黒に“決定”したりする場合に多く用いられるように思われる。以上を少し単純化して示すと次

(形容詞)	黒く	する……	黒く	変える
(名詞)	黒	にする……	{ (黒) に変える 黒 と換える 黒 を選ぶ 黒 に決める	

のようになる。したがって、「黒くする」は、“変化”のしかたに関係するから、程度を示す語を添えて「もう少し黒くする」と言うことができるが、「*もう少し黒にする」はおかしい。（「なる」についても同様に考えることができる。）ところが、「黒にする」の場合、“決定”を表す用法に着目すれば「黒にする」は「黒に決める」と言い変えることができるのに対し、「黒くする」は「*黒く決める」と言うことができない。

たとえば、新車を購入しようとしてセールスマンに、

⑫' どんな色になさいますか。

と尋ねられた場合、その答は、

⑬' 黒にしてください。

であろう。「黒く」は使えない。ところが、紺色のセーターを染め直してもらう場合はどうだろう。“変化”としてとらえて、

⑬'' 黒くしてください。

と言うのが自然であろう。

以上、「黒にする」、「黒くする」の意味面での違いを考えたが、実際の言語場面では、これに先にみた形態上の問題が微妙に絡んでくる。すなわち、少し割り切っていえば、表現しようとする事柄が同じ“変化”に関する場合であっても、単に形容詞の連用形を使って「モノを黒くする」と表現したり、「黒いモノにする」というように名詞的に捉えて「黒にする」と表現したりすることがある。前者は、変化の方向・内容つまり「どう変えるか」という変化の“しかた”に力点が置かれ、どちらかといえば動的であるのに対し、後者は、変化の“結果”、“到達点”つまり「何に変えるか」に主眼があり、やや静的な感じがする。同じ陶工の解説でも「⑦黒にします」に比べ、「⑩こことここは、青くします」が、陶工自ら釉薬をかけながら説明しているような印象を与えるのはそのためだろうか。

また⑭の「こことここは、青くします」では、「は」の用法を確認させておきたい。これは、

⑭' こことここを、青くします。

の「こことここ」が主題化されて「を」が「は」に変わったと考えてよからう。したがって、「朝ごはんは食べました。」が「昼ごはんはまだです。」などの含みを持つと同様、「こことここ」で示される二箇所だけを青くして、他は全部別の色なのだという強調とみることもできるし、青くする部分と黒くする部分の対比とみることもできよう。それは、場面、場面における話し手の表現意図をどう解釈するかによる。

画面は、釉薬のかけ終わった皿のアップ。釉薬が乾いて二色とも明るさを増し、皿はサーモンピンクの地に薄いグレーのストライプとなっている。陶芸にとくに詳しくない人なら、素朴な疑問がわく。それが見学者Bの間となって現れる。

B「⑮こんな色が、黒や青になりますか。」

かけられた釉薬の色が、説明されている黒や青からおよそほど遠いことからきた驚きの気持が「こんな」に込められている。「こんな」のこの用法は色見本を持って何かを買いに行って、

〔12〕 こんな色の欲しいんですが。

などと言うときの用法とは教育上区別して示されるべきであろう。ここでの「こんな」は、そのものをとくに他から区別する話し手の気持が働いて発せられるものであるが、その場合そこに込められる話し手の価値判断は、文脈から類推されるものであり、「こんな」自体は意味的に中立である。たとえば、

〔13〕 こんなこともわからないんですか。

と言えば、その「こと」の易しさ、単純さなどを強調することになり、

〔14〕 こんなこともわかるんですか。

と言えば、その「こと」の難しさ、複雑さなどを強調することになる。

「この」―「こんな」と同じ対応で「その」―「そんな」、「あの」―「あんな」があることはいうまでもない。また、これと似た用法を持つものに、例示を表す「など」に対する話し言葉「なんか」、「なんて」がある。

ここで、⑮の「こんな色が、黒や青になりますか。」に使われた「なる」について考えておこう。皿の着色について、陶工の意志（計画）はすでに確認

済みである。そして陶工は、実際に皿に釉薬をかけるところまで、すなわち自ら直接関与できる（「する」の世界の）ことはすべて済ませている。とすると、後は「なる」の世界である。皿の色そのものがどう変わるのかに主眼が置かれることになり、「する」でなく「なる」が使われるのは明らかである。

また、「⑮こんな色が、黒や青になりますか。」で「青く」でなく「青に」が使われているのは、「変化」そのものより“目標”すなわち完成品としての皿の色に力点が置かれているからであろうか。しかし、とくにここでは、見学者Bの間を、一色ずつ二つに分けて、

⑮' こんな色が、黒^く_にになりますか。

⑮'' こんな色が、青^く_にになりますか。

とした場合、力点を“変化”に置くか“結果”に置くかで「く」も「に」も成立するのに対して、⑮のように二色いっしょにして「黒や青」とすると、「黒や青に」のみとなり、形態的、語法的条件から「青^く」の使われる余地がなくなるという点も押さえておきたい。

画面はかわらない。見学者の間「⑮こんな色が、黒や青になりますか。」に対し、陶工は自信たっぷりに答える。

陶工「⑯ええ、なりますよ。」

「なる」が使われているのは、その質問⑮と同様、話し手が主体そのものの変化を問題にしているからである。

ここでは、陶工の答え方に注目させたい。「なる」の基本的な語法を考えれば、⑯の基底には、

⑯' こんな色が、黒や青になる。

(B) (C)
という構造があるはずだが、表面すなわち陶工の答には、「変化するもの」(B)も「変化する目標」(C)も現れていない。ここでの問答は、目の前の色が、黒や青に「なるかならないか」(だけ)を問題にしているのであるから、⑯の「ええ、なりますよ」が必要十分でかつ最も自然な答え方であることをしっかり理解させておきたい。

ここで、画面全体が炎にかわり、再び窯に入れて焼くことが示される。

陶工「⑦これをもう一度、窯に入れます。」

これは、陶工が「⑥ええ、なりますよ。」と言った後、ほとんどポーズなしに「まあ、ごらんになってください。」とでも言わんばかりの調子で続ける台詞である。先にみた⑧の「乾かします。」、⑨の「窯に入れます。」、⑩の「焼きます。」などと同様、ナレーションの形式である。

画面はかわり、完成した皿のアップ。黒地に青が二筋流れ、光沢があって美しい。見学者が感嘆の言葉をもらす。

B「⑬美しい皿になりましたね。」

A「⑭いい色になりましたね。」

いずれも完成した皿に向けられた感嘆の言葉だが、サウンドトラックの⑬は、その気持が十分表れているとは言い難い。文末の「ね」が曖昧だからである。これも、模倣練習のモデルなどにしないように注意したい。

語法上は、すでにみた「名詞＋になる」でとくに問題はなかろう。意味の上では、同じ“変化”でも“結果”（到達点）に主眼の置かれた用法となっている。ここで「する」ではなく、「なる」が用いられているのは、二度の窯入れを含めた長い工程を経てやっと完成した皿（結果）そのものの出来栄に話者（見学者）の主眼が置かれているからであろう。しかしここで、仮に陶工のすばらしい仕事ぶりに心を動かされた見学者が「する」を使おうとしても、

⑬' 美しい皿にしましたね。

と言うことはできまい。陶芸のかわりに絵画の場合を考えてみてもよい。画家は、作品の出来栄を陶工以上にコントロールできそうに思われるが、それでも「いい絵にしましたね」という褒め方は不自然である。これは、われわれが作品の制作などについて語る場合、制作者の活動や制作の過程よりは、“結果”すなわち作品そのものに主眼を置いて考えることが普通であるからであり、主体そのものの変化を問題にすることになるので「する」は使うことができない、と理解することができよう。目の前にある作品を心から褒め

ることが、間接的に制作者（の仕事ぶり）を褒めたたえることになるのはいうまでもない。

しかし、同じ賞賛でも、相手の“決定”，“選択”について、それを褒めるような場合は「する」を使うことができる。焼きあがった皿の色を褒めるときには使えなかった、

⑱' いい色にしましたね。

も、スーツや着物を新調した相手に対してなら使えるのではあるまいか。

以上、一塊の粘土から一枚の美しい皿が焼きあがるまでを見てきたが、この映画では、時間の流れの速さがほとんど無視されている。あたかも数時間で皿が焼きあがるかのような印象を与えるが、粘土→ろくろを用いて皿の形を作る→乾かす→窯に入れて焼く→釉薬をかける→窯に入れて焼く→完成品としての皿、という工程のすべてが一日や二日で終わらないことはいうまでもない。

Ⅱ 練習問題（PART 1）

このⅡの「れんしゅう」は、問答形式による約40秒間の練習である。四つの問答は、すべてその前に見たPART 1のⅠ（皿ができるまで）を題材としている。問答ごとにみていくことにしよう。

Q「⑳どうしましたか。」

A「㉑薄くしました。」

㉒大きくしました。」

⑳の「どうしましたか。」は、陶工がろくろを使って粘土の塊を薄くしていくその手もとを画面で見せながらする最初の質問だが、「どうしましたか。」は、普通「どうかしたんですか。」というような意味で使われることが多いためか、多少唐突な感じはする。視聴者である学習者は一瞬どう答えてよいか途惑うかもしれない。しかし、先に見てきた同じ場面の繰り返しでもあり、次の答「㉑薄くしました。」「㉒大きくしました。」を聞いて、ああ、そういう答でよかったのかと納得する学習者も多いと思われる。

「㉔どうしましたか。」は、動作主である陶工の立場に着目してなされた質問だが、あえて語を補えば、

㉔' 陶工は、粘土（の塊）をどうしましたか。

とでもなろうか。「㉔薄くしました。」「㉔大きくしました。」は、㉔の質問「どうしましたか。」に対する答だが、問の場合と同様に語を補えば、

㉔'+㉔' 陶工は、粘土を $\left\{ \begin{array}{l} \text{薄く} \\ \text{大きく} \end{array} \right\}$ しました。

となる。

この問答について大切なことは、その答が絶対的なものでないという点である。正解という意味では、㉔、㉔の順序は逆に㉔→㉔でも良いし、㉔、㉔のどちらかひとつでも良いし、さらに㉔の「まるい皿にしました。」を先取りして答えても良いし、「まるくしました。」でも、また「皿にしました。」でも誤りとはし難い。

しかし、いずれの場合でも、「する」を用いた質問「㉔どうしましたか。」に対しては、「する」を使って答える必要のあることは確認しておきたい。

Q「㉔どんな形にしましたか。」

A「㉔まるい皿にしました。」

㉔の質問がされるとき、画面では、すでにまるい皿の形ができています。つまり厳密には、もはや陶工のすることをゆっくり観察する必要はないわけである。

㉔の質問は、㉔の「どうしましたか。」が、陶工の行っていることについての漠然とした問であったのに対して、やや具体的に「どんな形に」したかと尋ねている。そこでその答だが、映画の台詞のように「㉔まるい皿にしました。」と答えるのもひとつの答え方である。また、問の文型をそのまま受けて「まるい形にしました。」と答えても良く、もっと簡単に「まるくしました。」でも問答は成り立つ。

Q「㉔どうなりましたか。」

A「㉔固くなりました。」

㉔の問のあと、画面では、ろくろの上の皿に炎がオーバーラップし、窯に入れて焼いたことが象徴的に示され、その結果として、㉔の「固くなりました。」という答が導かれるという仕組みだが、もし、この「れんしゅう」の場面だけだったら、その答の必然性は、やや弱いといえよう。しかし「れんしゅう」が、その前の部分（I. 皿ができるまで）の確認、復習であることを考えれば、この「㉔固くなりました。」は、それほど無理な答でもなからう。

なお、ここで確認しておきたいことは、この質問㉔が、前の二つの質問㉒㉓と異なり「なる」を用いている点である。これは、先にみたように、「固くなる」という変化に関し、変化を起こさせる主体を陶工ではなく炎の熱と考え、主体（皿）の変化そのものに主眼を置いて尋ねているからであろう。

映画の画面を注意深く見てみると、陶工の手は静止して背景となり、炎が画面いっぱいオーバーラップして、いかにも人間の力ではなく、炎の熱によって自然に固く「なった」という感じを与え、学習者の理解には好都合である。

Q「㉕どんな皿になりましたか。」

A「㉕美しい皿になりました。」

㉕の問が発せられるとき、画面には二色の釉薬のかけられた皿の部分が映る。それは、先にI-3で見学者が驚いて「㉓こんな色が、黒や青になりますか。」と尋ねたサーモンピンクと薄いグレーの二色である。そして、それがすぐにつやのある黒と青の美しい色に変わり、画面いっぱいに完成した皿の全体が映し出される。

さて、「㉕どんな皿になりましたか。」の答だが、これにはいろいろ考えることができる。映画で示される答㉕の「美しい」は、主観的表現であり、そのように答えなければならぬ必然性は弱い。

色が大切にされている画面に忠実にということであれば、初級段階の学習者から「黒い皿になりました。」とか「青い皿になりました。」などの答が出て

くるのはむしろ自然である。また、全体的な印象を言うのであれば、「美しい皿」だけでなく「きれいな皿」、「りっぱな皿」などがでてきてもよからう。

要するに㉔の質問は、「変化」というよりは、完成した“結果”が「どんな」であるかという問である。ひとつの結果をどう見るかはかなり主観的なものであるから、一定の反応で学習者の理解を確認することがこの種の練習問題に必要な一条件であるとするならば、この㉔は少し都合の悪い問ということになるかもしれない。

Ⅲ 夜明け前から夜まで（PART 2）

画面は真っ暗、夜明け前の町だが、街灯が白くわずかにともっていることで下の方が町だとわかる。

空の黒が濃紺に変わり、その色が見る見るうちに薄くなって朝になったことが示される。その後、場所は同じだが、画面は夕方にとび、夕焼けを経て夜になり、ひとつふたつ街灯やネオンがとまり、再び真っ暗になる。この間わずか32秒の特殊撮影だが、国によって程度の差こそあれ映画やテレビが普及した今日、これを見て現実の自然の変化をそのまま映したものだと思って疑問を感じるような学習者はまずなかろう。参考までに示すと、この部分は現実の時間の流れを約240倍速めるためにコマ落としで撮影されている。

以下㉕から㉙までは、いま見た情景の変化に従って、実況中継放送的になされるナレーションである。

「㉕明るくなります。」

「㉖朝になりました。」

「㉗赤くなります。」

「㉘暗くなります。」

「㉙夜になりました。」

当然のことながら、この五つの文を眺めてすぐ気付くことは「なる」しか使われていないことである。これは、PART 1（ⅠおよびⅡ）と著しく異なる点でもある。

「なる」しか使われていないのは、いうまでもなく、自然現象には人間の力の関与する余地がないからである。なお、主格が人間でない場合には、下の例のように自然現象について「する」を用いることもあるが、ここで初級の学習者に紹介するには特殊すぎる。

〔15〕 神様、早く朝にしてください。

〔16〕 照る照る坊主、照る坊主、あした天気にしておくれ。

ただ、ここで注意しなければいけないのは、学習者に、言葉の形のみに着目して「明るい」、「赤い」、「暗い」などが常に「なる」に結び付くのだというような早合点をさせないことである。そんな誤解をたくみに避けるような工夫が、練習問題には求められるべきであろう。

「㉔明るくなります。」

画面では、夜明け前の闇が少しずつ明るくなっていくところが示される。ここでは、㉔がその“推移”を表す説明であることをまず確認しておきたい。

初級段階の学習者でも、画面さえ見ていれば、そのナレーションである㉔の意味をとることはきわめて容易であろう。ただここでは、文の成分としての主語を明らかにしようとして「何が明るくなるのですか。」などと質問すべきではないことに注意したい。もしそんな質問をすれば、学習者のある者は途惑うことになるだろう。ごく単純に「空が…」と答える学習者の多い中に「風景全体が…」とか「画面が…」とか答えようとする学習者もあろう。また「町全体…」と考える学習者もあるかもしれない。いずれにせよ、「何が明るくなるのですか。」の答についての議論はあまり意味がない。指導上の留意点としては、むしろ主語をはっきりさせないこの種の表現形式に慣れさせることが大切である。

主語をはっきり言わないという点では、次の「㉔朝になりました。」や㉔の「夜になりました」なども好例といえよう。表面に現れていない主語は、意味上、ちょうど英語の *it* の“天気・時間・距離・漠然とした状況などをさす”という用法に似ている。ただし、似ているのは、その意味面の特徴であって、構文的には、日本語の場合英語のこの種の *it* に相当する語を用いない

ということを学習者はしっかり理解すべきであろう。以下に示す文なども主語を無理に補おうとするとおかしいことになるが、英語なら構文上すべて主語を持つことになる。

〔17〕 東京はずいぶん涼しくなりました。

〔18〕 いい季節になりましたね。

〔19〕 まもなく午前1時になります。

〔20〕 卒業して2年になります。

「⑩朝になりました。」は、夜が明け、空が白み、すっかり明るくなった時点でなされる説明である。

文の形は「名詞＋になる」であり、その名詞（ここでは「朝」）が、変化の「結果」や“到達点”などを表すことは、すでにⅠ－3の⑬，⑭でみた通りである。ここでその語法について整理してみると、「名詞＋になる」には「AがBになりました」のほかに、「Bという状況が生じた」の意味で単に「Bになりました」という用法があることになる。以下はそれぞれの用例である。

〔21〕 かぼちゃは、美しい馬車になりました。

〔22〕 やがて12時になりました。

「⑪赤くなります」は、夕焼けで、空が赤くなっていく情景についての説明だが、残念なことに、映画の空の色の変化はあまりはっきりしていない。そう言われてみれば赤くなったかな、と思う程度の変化である。

語法的には、⑫の「明るくなります。」と同様「形容詞＋なる」でとくに問題は無いが、⑫の場合の「明暗の変化」に比べ、「赤くなる」という「色の変化」は、映画の夕焼けが町全体（画面全体）を真っ赤に染めるほど見事なものでないこともあり、空もしくは空の一部に限定されそうである。つまり⑪は「空が赤くなる」のである。

「⑫暗くなります。」は、夕焼けの後、空がしだいに明るさを失い、濃紺に変わっていく状況の説明である。この⑫は、すぐ前の「⑪赤くなります。」の延長上にあるものである。「空が暗くなる」のは確かだが、「⑬暗くなります。」

の主格は、先にみた「㉔明るくなります。」同様、無理にはっきりさせる必要のない漠然としたものと考えられる。

「㉓夜になりました。」は、全体がどんどん暗くなり、画面で天と大地の区別がつかないほどになったとき、つまり誰もが「もう夜だ」と感じられるようになった時点でなされる説明である。この文の主格について「何が夜になったのですか。」などと尋ねることが無意味であることは、「㉒朝になりました。」ですでに述べた通りである。

なお、学習者は、この部分を見ながら、

㉔明るくなります。

㉒赤くなります。

㉓暗くなります。

が「__ます」の形で進行中の変化もしくはすぐ後に起きる変化について述べているのに対し、

㉒朝になりました。

㉓夜になりました。

が「__ました」の形を用い、新たに生じた状況について述べていることを、ごく自然に理解するであろう。

Ⅳ 練習問題（PART 2）

このⅣの「れんしゅう」は、Ⅱと同様の問答形式による練習である。構成的には、Ⅲの「夜明け前から夜まで」についての三つの問答に、富士山の色の変化についての問答がひとつ付け加えられた形になっている。

Q「㉔どうになりましたか。」

A「㉓明るくなりました。」

この「㉔どうになりましたか。」は、何とも唐突な質問である。ネイティヴ・スピーカーとして、普通の言語生活でこのような場面に臨み、こんな質問をすることがあるのかという疑問がわくのは自然である。ここでは、練習のための表現と割り切るしかなかろう。

この種の問題は、あくまで練習のための表現形式と考えるにしても、ここで、もうひとつ指摘しておきたいことがある。このPART2の「れんしゅう」に現れる一連の質問が、決して理想的な問の形式ではないということである。なぜなら、「なる」、「する」の使い分けを中心的な指導項目のひとつにしているこの映画の中の練習問題の間に、はじめから肝心な「なる」を使ってしまうのは、あまり賢明なアプローチとはいえないからである。「なる」は、むしろ「なる」を含まない問に対する答として学習者に使わせたいところである。

ここでは、「なる」の前にくる語の選択およびその接続を課題として練習させると考えるべきだろうが、それにしても、「なる」の前はほとんど形容詞で変化に乏しく、ひとつある名詞は付け足し的で、問に対する答とは認め難い。

こう考えてくると、映画制作にあたって、むしろ音声による問を与えずにすでに同じ情景の変化を解説付きで見ている学習者に、ナレーターになったつもりで自由に説明させる形式にしたほうがよかったかもしれない。この種の映画を学習者だけで見ることは少ないと思われるので、教師は、学習者の自由な発言（説明）を場面に即してチェックしながら、効果的な指導を行うことができるにちがいない。それは、学習者にとって、能動的な練習の第一歩となるであろう。

Q「㊤どうになりましたか。」

A「㊤赤くなりました。」

先に、提示の部分(Ⅲ)の「㊤赤くなります。」で述べたように、残念ながら画面の変化が明瞭ではないので、練習の問答も多少不自然なものになっている。すなわち、夕焼けの画面が現れてから「㊤どうになりましたか。」という問が発せられるまで、空の色がとくに赤味を増すようには見えないからである。少なくとも「赤くなった」が自然に口をついて出るような映像ではない。

しかし、教室で学習者とそれについて議論してみても意味がないので、あくまでⅢで見た情景の変化の確認もしくは復習、練習をするための約束ごとと考え、教師は、実質的な練習を効果的に行うよう工夫すべきであろう。

ただ、教師が、この映画教材にこの種の不備もしくは欠点のあることをあらかじめ知っておくことは意味のあることである。その場の学習課題に直接関係のない細かいところに妙にこだわってしまう学習者がいるものだが、そんなとき教師は、まえもって使用教材の問題点を心得ていさえすれば、あっさり「ああ、これは、映画のこの部分がおかしいんです。」と認めて学習者の不必要な疑問を解いて先へ進み、より大切な指導事項に十分な時間を割くことができよう。しかし、学習者が強く疑問を訴えない限り、教師は、使用している教材のマイナス面について不用意に語ることを避けるべきである。

Q「㉔どうになりましたか。」

A「㉕暗くなりました。」

㉖夜になりました。」

㉔、㉕の問答が、映像的にはその前の問答㉒、㉓の後で一旦切れているのに対し、この㉔、㉕、㉖は、㉒、㉓に直接続いた画面となっている。

「㉖赤くなりました。」という答のあと、画面はどんどん明るさを失い、いよいよ夕闇の迫ったことが示される。そして、地平線が闇の中にまさに消えようとする瞬間に、問「㉔どうになりましたか。」が発せられる。

その答、「㉕暗くなりました。」は、ごく自然に無理なく導き出されるはずである。ただ、ここで、教師が「何が暗くなったのですか。」などと聞かないほうが良いことは先に述べた通りである。

ここで問題となるのは、それに続く答、「㉖夜になりました。」である。これを唯一の答として学習者に求めるのはまず無理である。問「㉔どうになりましたか。」に対して、学習者は「㉕暗くなりました。」と答えるだけで、その後何も言わないほうが反応としては自然でさえある。この「㉖夜になりま

した。」は、画面がすっかり暗くなり、わずかにともる街灯やネオンが印象的に働き、今まで見てきた映像の流れ、都会のある風景の「夜明け前から夜まで」つまり一日の終わりとしての“夜”を強く感じさせ、人によっては何となく「㊤夜になりました。」と言いたくなるかもしれない、といった程度のものであり、教育の場面で練習問題の正解として学習者に期待すべきものではない。あくまで、付け足し的なものと考えるべきである。

そもそも、㊤の質問「どうになりましたか。」は、様子、状態を問題にして「どのように」と聞いているのであるから、「夜になった」と答えることには無理があるわけである。

突然、画面いっぱい富士山の全景。実景ではなくスチール写真である。ズーム・アップしたところで雪の富士山のスチールにかわり、ズーム・バックして再び全景となる。画面は雪化粧した富士山。

これは、練習の一部である。PART 2の「れんしゅう」の最後は、この富士山についての問答である。

Q「㊤どうになりましたか。」

A「㊤白くなりました。」

このような場面で、「㊤どうになりましたか。」という問がどの程度自然かなどということさえ問題にしなければ、学習者がつまづくことのない問答といえよう。

この問答以外は、すべて「れんしゅう」に先立って一度提示された場面についての半ば復習的な問答である。したがって学習者は、提示の部分の注意深く見ていれば、間に正しく答えることはそれほど難しくないと思われる。記憶に頼って答えることもできよう。

しかし、ここでの問答㊤、㊤は、提示の部分(Ⅳ)と題材の上で全く関係がなく、学習者にとって新しいものである。その意味では、この「㊤どうになりましたか。」こそ、学習者の理解を試すのによい問といえるのだが、何といってもこれひとつだけでは大きな意味は与えにくい。それに、この練習も

「なる」を使った間にそのまま「なる」を使って答えればよく、「形容詞＋なる」もすでに何度も現れていて語法的にやさしく、平均的な学習者にはもの足りなさを感じさせるかもしれない。

ただ、「㊤どうになりましたか。」はかなり漠然とした質問であるので、「㊤白くなりました。」のみを正解とするわけにはいくまい。漠然と「㊤どうになりましたか。」と尋ねているのだから「富士山が白くなりました。」と答えることもできよう。「白い富士山になりました。」「きれいな富士山になりました。」などというこの映画のタイトルの思い出させる答もあろう。また、ここでの学習課題「なる」を忘れて「冬の富士山の写真にかわりました。」などと答える実力のある学習者もあるかもしれない。

以上みてきたⅢおよびⅣ、すなわち都会の夜明け前から夜までを題材としたPART 2について確認しておきたいことは、自然現象の変化を表すのには「なる」しか用いられないという点である。これは、自然現象を普通に表す動詞に自動詞が多いことにも関連しよう。

V 寮で (PART 3)

画面は、机に向かって勉強している男性。大学生のようだ。はじめて映画を見る学習者にはわからないことだが、ここでは便宜上、シナリオをもとにこの男は坂本という名前で、場所は(大学の)寮の坂本の部屋ということで話を進めることにしよう。

部屋の全体はわからないが、右端にベッドが見えている。二段ベッドのようなので二人部屋なのかもしれないが、やはりここでは簡単に坂本(一人)の部屋ということにしておく。

V-1 大きな音が聞こえてくる (㊤)

坂本は勉強中である。突然、隣の部屋から大きな音が聞こえてくる。ジャズ風の音楽である。とくに好きな人でなければうるさく感じられるような音量なのだろう。坂本は、迷惑そうな顔で隣の部屋のほうを振り返って口を開

く。

坂本「㊤大きな音だな。」

これはひとりごとである。文末の「な」は、詠嘆を表す終助詞である。終助詞「な」には、この外、

〔23〕 動くな。

〔24〕 ニヤニヤするな。

のように動詞の終止形について禁止を表す用法があり、さらに

〔25〕 外に出な。

〔26〕 もう一度言ってみな。

のように連用形に接続して命令を表す用法もあるが、初級の学習者には混乱を与えるだけなので、問題にしないほうがよからう。

詠嘆の「な」に限って考えても、初級の学習者にとって大切なのは「…だな／かなと思う」といった用法であり、映画のようなひとりごととしての用法は、理解できればよく、すぐ使えるようにする必要はないと思われる。

たとえば、ひとりの初級段階の学習者が、秋の空を眺めていて心から「きれいな空だ」と思ったとしよう。全くのひとりごとなら、母国語で言えばよい。自分の感動を口に出して、「きれいな空だな(あ)。」と言う場合でも、誰かがそばにいたとしたら、それは、よほど親しい友人か目下の人、極端に言えば感動のあまり一瞬間その存在を無視することが許されるような人間に限られ、そうでない場合には、いっしょに同じ空を仰いでいる人に同意を求めるような形で「きれいな空ですね(え)。>」と言うほうが、より自然で、好感も持たれよう。

「㊤大きな音だな。」の主格を「あれ」とか「それ」とか問題にする必要のないことは、PART 2の「㊤明るくなりました。」「㊤朝になりました。」「㊤夜になりました。」のところですでにみた通りである。

「大きな」は、品詞的には「小さな」、「おかしな」などととともに連体詞とされ、連体修飾語としてのみ使われる。歴史的には、文語の形容動詞「おおきなり」の連体形「おおきなる」の「る」が落ちた形である。

語法上、「大きな」は、「大きい」との比較において、抽象的なものを修飾する場合には一般に「大きな」が用いられるが、話し言葉では「大きい」より「大きな」のほうが多く用いられるようである。たとえばこの日本語教育映画第6課の「しずかな こうえんで」には、男女が池の鯉を見るシーンで、

〔27〕 男「いろいろな鯉がいますね。」

〔28〕 女「大きな鯉や小さな鯉、たくさんいますね。」

というように、「大きな」、「小さな」が用いられている。ここでは、「大きい」、「小さい」が普通ものの大小（サイズ）を問題するのに対し「大きな」、「小さな」は、それぞれに対応する形容詞の持つ意味に加えて、話し手が自分の気持を込めて表現することが多い点に着目しておきたい。「大きな」「小さな」が話し言葉に多く用いられるのも、このことに関係がありそうである。

坂本は、そのうるさい音楽に耐え切れず、手にしていた鉛筆を置き、注意しに行こうと立ち上がる。ここで室内のシーンは終わる。

V-2 森の部屋の前で（④④～④⑦）

次の場面は、寮の廊下。坂本が、隣の部屋のドアをノックする。ノックのしかたがいかに固く、忿懣が表れている。

ドアを開けて現れた森という名の隣室の住人は、のんびりした感じのする学生である。彼は、何でもない調子で何の用かを尋ねる。以下、この場面の二人のやりとりである。

森「④④何ですか。」

坂本「④⑤森さん、音をもう少し小さくしてください。」

森「④⑥すみません。」

④⑦小さくします。」

まず「④④何ですか。」について、無理にその主格を補えば「あなたの用は何ですか。」とでもなるのだろうが、こんな場面では不自然である。学習者

には、そのままひとつの表現として場面との結びつきで理解させるのが望ましい。「㊤何ですか。」は、映画のような場面のほか、人に呼ばれたり声をかけられたりしたときなど、かなり広く使える表現といえよう。ただ、初級の学級者には、意味は同じでももう少しやわらかな表現「何でしょうか。」を身につけさせたほうが、利用範囲が広いかもしれない。

ところで、森と坂本の関係だが、とくに親しくもない同級生といったところだろうか。隣り合った部屋に住むある程度親しい男同士なら、こんな場合「㊤何ですか。」はややよそよそしい。「何か用?」、「なあに?」ぐらいが普通であろう。では坂本は先輩なのかと思うと、次に坂本が「㊤森さん、音をもう少し小さくしてください。」と言うので、結局同級生といったところに落ち着く。

ここで少し触れた人間関係と言語表現についての問題は、中級段階以上の学習者にとっても難しいものだが、必要なところで自由に止めたり、同じ部分を繰り返し観察させたりすることのできる映像教材のメリットをうまく生かし、具体的な場面を素材にしてスピーチ・レベルやスピーチ・スタイルについての基本的な感覚を身につけさせるような指導が、初級段階から工夫されるべきであろう。

㊤の「森さん」は、呼びかけ語である。国によっては、学生寮に住む者同士なら姓でなく名で呼び合うことも多いかもしれないが、日本では、こんな場合姓で（男の同輩なら呼び捨てで）呼び合うのが普通であることを確認させたい。

坂本は、単刀直入に音を小さくしてくれるように頼んでいる。「動詞+てください」を使った依頼の表現である。これについては、同じ日本語教育映画基礎篇の第13課、依頼・勧誘の表現をテーマとした「おみまいにいきませんか」の解説書（p. 29～p. 33）を参照されたい。

初級の学習者に対しては、より丁寧な依頼表現として「動詞+てくださいませんか」を確認しておく必要があるだろう。相手の行動を相手の選択に任せる余地を残した表現である。

ただ、本当に難しいのはその先の指導，すなわち文単位の比較で種々の表現の丁寧度の順序がわかるという段階を経て，与えられたひとつの状況での表現意図や待遇関係などを考えたうえで，最も適当な表現を選ぶことができるという段階まで進める指導である。

ここで問題にした依頼表現に限ってみても，その表現の意図が純粋な依頼にあるのか，懇願もしくは間接的な非難にあるのかなどによって事情は異なってくる。たとえば，ある人が自分の家に招いた客に対して次のように言う場合はどうだろう。

〔29〕—a「たくさんめしあがってください。」

〔30〕—b「たくさんめしあがってくださいませんか。」

〔31〕—a「遠慮なさらないでください。」

〔32〕—b「遠慮なさらないでくださいませんか。」

a, b のどちらがより丁寧なのか，そしてより適切なのかを考えてみれば，「動詞＋てくださいませんか」のほうが丁寧さの程度が高いというような説明では不十分であることがわかる。

この坂本の依頼表現に，この映画の中心的テーマ「する」が使われている。他動詞の基本的用法として押さえておかなければならない構造は「森が音を小さくする」である。これは，PART 1 の「③薄くします。」「④大きくします。」がその基底に持っている構造と全く同じである。

ここでは音の変化を問題にしているわけだが，オーディオ・セットで音楽を楽しむ場合，音量は聞く人が調節するのが普通であり，この映画の場面のように，調節する主体(動体主)の立場で音量の変化について表現する場合，「する」しか選ばれないことを確認しておきたい。

ここでは，坂本に頼まれた森がボリュームのつまみを回しさえすれば音を小さくすることができる，つまり森は音量の変化をコントロールすることができるから，依頼の表現としても「してください」が選ばれることになる。

「もう少し小さくしてください」の「もう少し」について注意しておきたい。ここでは，文字通り，(ステレオの音を)「今よりもう少し小さく」の

意味で理解してもさほど問題にはならないが、学習者は、「少し」に「ちょっとすみませんが…」の「ちょっと」のように依頼や要求の表現をやわらげる用法のあることを知っておくべきである。相手に温かく働きかけることが、結果的には話者の目的（意図）達成を容易にするということであろう。

坂本は、「㊤森さん、音をもう少し小さくしてください。」と言うとき、ボリュームのつまみを回す真似をするのだが、彼はつまみを右に回す。些細なことだが、右につまみを回して音量をしばるオーディオ・セットは珍しい。

㊤㊦で、森は素直に謝り、ステレオの音量を下げると言う。㊤の「すみません」が軽く謝るときの表現であることは初級の学習者でもよくわかっていることだが、最近では、日本人が「ありがとうございます」と言うべきところで「すみません」と言うことがあるので、それについて疑問を感じたことのある学習者もあるかもしれない。お茶などを出されて「すみません。」と言う人の心理は「（忙しいところ）よけいな仕事をさせてすみません。」「（突然やって来て）迷惑をかけてすみません。」などということなのだろうが、教育上の扱いとしては、やはり「ありがとうございます。」をしっかりと身につけさせるべきだろう。

同じ謝罪の表現で初級の学習者がよく知っているものに「ごめんなさい」があるが、「すみません」は「すみませんが…」というように依頼表現の軽い前置きとして用いることができるという語法上の相違を確認しておけばよいであろう。

㊦の「小さくします。」は、補えば「私（森）が音を小さくする」となり A が B ㊦ C スル」の A、B、C 三要素中、C の「小さく」だけが表現されたものである。普通の初級教科書の文構造に慣れている学習者には難しいはずなのだが、映像が作る場面に助けられてごく自然に意味をとる学習者も多いと思われる。指導目標としては、ただ理解できるという段階に留まらず、学習者に十分観察させ、自然な言語生活の場面で実際にはどんな構造の文が現れるのか、その用法を場面に即して学ばせることが大切である。

画面はかわり、森がステレオのところへ行って音量を下げる。森がボリュームのつまみを左に回すにつれ、音楽はしだいに低くなる。

V-3 音が小さくなって (48)

ここで、画面は坂本の部屋に戻る。隣室の音楽も聞こえなくなり、いかにもホッとした様子の坂本が戸外を眺めながら思わずつぶやく。

坂本「48 ああ、静かになった。」

これがひとりごとであることは、初級の学習者にも明らかである。「ああ」は、嘆き、喜び、悲しみなどを表す感動詞。ここでは、坂本の安堵感がよく表れている。なお、感動詞「ああ」には、対等もしくは目下の人からの間に対する肯定的な反応を表すものもあるが、とくに学習者から質問などがない限り、ここで教師のほうから指摘する必要はない。

「48 ああ、静かになった。」で「なる」が使われているが、これは、自然現象を扱ったPART2で何度もみた「なる」、つまり話者が関与できない変化を表す「なる」であり、もはや学習者が問題を感じることはあるまい。

なお、話者が自分以外の動作主の行為に着目して「ああ、小さくした。」とひとりごとを発する場合もないことはない。たとえば、坂本が何度注意してもなかなか従わなかった森が、やっとステレオの音量を下げたでしょう。そこで、話者坂本が自分の聴覚でとらえる音そのものに着目してつぶやけば、
[33] 「ああ、(やっと) 小さくなった。」

となるだろうが、期待通りに音量を下げてくれた森(の行為)そのものに着目してつぶやけば、

[34] 「ああ、(やっと) 小さくした。」

となるかもしれない。

次に語法上の問題として、48の「静かになった」にはじめて現れる「形容動詞+なる」に注意させるべきである。形容動詞そのものについては、日本語教育映画解説5「しずかな こうえんで」に詳しい。ここでは、「なる」「する」との接続について、形容動詞の語幹が名詞に相当し「__になる」

「__にする」となることを十分理解させることが肝要である。この映画のタイトルに使われている「美しい」が「美しく__」となり、類義語の「きれいだ」が「きれいに__」となることを、語法上の基本としてしっかり身につけさせたい。

なお、ここでの「静かになった」は、「静かになりました」と比べて、丁寧さのレベルの低い形と考えるべきではなく、独白もしくは発話以前の内的な思考そのものであり、文体や丁寧さの程度を考える必要のない形ととらえるべきであろう。

Ⅵ 練習問題 (PART 3)

このⅥの「れんしゅう」も、Ⅱ、Ⅳと同様、問答形式の練習である。四つの問答がすべてその直前に提示された内容 (Ⅴ) を素材としていることは、PART 1, PART 2 の場合と同じである。問答ごとにみていくことにしよう。

Q 「④森さんは、何をしましたか。」

A 「⑤音を大きくしました。」

まず、画面にステレオ・アンプのボリュームのつまみを右に回す手が映る。このシーンを見る人は誰でも、瞬間的に「ああ、さっき見たあの場面だ」と思い、そこに④の問が出されるので、画面に現れているのが森の手であることを理解するであろう。しかし、実はこのシーン、前の提示の部分 (Ⅴ) にはなかったものである。坂本に注意された森がステレオの音量をしばるシーンと酷似しているが、注意して見ると、この画面ではボリュームのつまみを右へ回している。当然のことながら、それにつれて流れているジャズの音量も高くなる。

そこで「④森さんは、何をしましたか。」という問が出され、ほとんどボーズなしにその答、「⑤音を大きくしました。」が示される。したがって、練習問題とはいっても、学習者に期待される「れんしゅう」は、正解が与えられるときにそれに合わせて小声で言ってみて自分の理解を確認する程度のこと

とである。

手もとだけ映る画面を見せて「④⑨森さんは、…」というのは多少乱暴ではあるが、すべて前に紹介された場面を前提としているのだから、初級の学習者にも何とか正しく対応してもらいたいところである。より自然な言語活動を行うために、常識や類推力を十分働かせつつ与えられた場面から必要な情報を選びとる“場面解釈力”とでもいうべき能力を、どのように身につけさせるか、これも初級段階から考えなければならない大切な課題のひとつである。

正解が「⑤⑩音を大きくしました。」だけでないことはいうまでもない。「音楽の音を大きくしました。」でもいいし、語彙さえ知っていれば「(ボリュームの)つまみを(右に)回しました。」も完璧な答になる。質問が「④⑨森さんは、何をしましたか。」なのだから、「ステレオをつけました。」や「音楽を聞きはじめました。」も全く見当外れとはいえない。注意すべきは、あくまでも森の行為に着目して反応させることであり、「音が大きくなりました。」などを決して許さないことである。

また、問答の自然さについての感覚を養う意味で、問に使われた主語を繰り返して「⑤⑩森さんは、音を大きくしました。」と答えることは避けるよう指導したい。聞き手が求める情報だけを自然に表現する方法も、初級段階から少しずつ指導すべき課題のひとつといえよう。

Q「⑤⑩音は、どうなりましたか。」

A「⑤⑩大きくなりました。」

場面はかわって坂本の部屋。時間的には、すぐ前の問答(④⑨, ⑤⑩)に連続した形になっている。(厳密には、数秒間戻っているのだが、あえて問題にする必要もなかろう。)

坂本が机に向かって勉強している。隣室からジャズが聞こえはじめ、それが急に大きくなる。映画のサウンドトラックはその音楽だけで坂本の声は聞こえないが、迷惑そうに何かつぶやく彼の様子が示され、「れんしゅう」の

問、「㊦音は、どうになりましたか。」が出される。それでも、日本語のネイティブ・スピーカーなら、坂本の口の動きと先に見た場面についての記憶から坂本が、「㊤大きな音だな。」と言っていることがわかるかもしれない。しかし学習者には、坂本が迷惑そうに何か（たとえば「うるさいな。」とでも）言ったと解釈できればそれで十分であろう。

「㊦音は、どうになりましたか。」という問が終わるか終わらないかのうちに坂本は立ち上がり、手前（実はドア）に近づいてくる。そこでその答「㊧大きくなりました。」が与えられる。

㊦の「どうになりましたか。」は、皿のできるまでを扱ったPART 1、都会の夜明け前から夜までを素材としたPART 2の「れんしゅう」で何度か使われている（㉔，㉔，㉔，㉔，㊦）ので、学習者がつまずくことはなからう。

ここで学習者に注目させたいことは、すぐ前の問が「㊤森さんは…」と、森に焦点を当てて彼が「何をしたか。」と尋ねているのに対し、今度の問が「㊦音は…」と、音に焦点を合わせて音が「どうなったか」と聞いている点である。そして、擬人法などの特別な表現でない限り、この「音」のような、動作主の主格として立ちにくい語が、主格として主題化される場合、述部に使われるのは「なる」であり「する」は使われないことを確認しておきたい。

この「れんしゅう」では、「なる」を用いた質問（㊦）に、同じ「なる」を使って答えるわけで学習者にとって難しさはないのだが、この場合、「なる」「する」の語法上の基本をきちんと身につけている学習者なら、問が完全な文の形でなく、ただ「音は？」と聞かれたとしても、その文脈から迷わず「なる」を用いて正しく反応することができるはずである。しかし、それが機械的な練習だけで指導されるべきでないことは、この種の語（ここでは「音」）が目的格として用いられて主題化された以下のような場合を考えれば明らかである。

＜テレビの調節をした人との問答＞

〔35〕 (Q)「色は？」

〔36〕 (A)「薄くしました。」

〔37〕 (Q)「(画面の) 明るさは？」

〔38〕 (A)「少し暗くしました。」

〔39〕 (Q)「音は？」

〔40〕 (A)「小さくしました。」

Q 「③森さんは、何をしましたか。」

A 「④音を小さくしました。」

場面はまた森の部屋に戻るが、今度はボリュームのつまみを左に回すところが示され、音楽も小さくなる。

③の質問は、④と全く同じである。今度は、ボリュームをしばるのだから、答は当然「⑥音を小さくしました。」となる。異なるのはその点だけである。接続の面でも、すでに何度も現れた「形容詞＋する」で、問題はなかろう。

ここでも質問の後にポーズはないので、学習者にできるのは、映画の答と同時に自分の理解を確認する程度の「れんしゅう」である。

Q 「⑤音は、どうなりましたか。」

A 「⑥小さくなりました。」

⑦静かになりました。」

場面は坂本の部屋。森の部屋から聞こえていたジャズが小さくなり、やがて消える。

質問⑤は、⑥の「音は、どうなりましたか。」と全く同じである。答はもちろん「⑥小さくなりました。」で、問題はなかろう。ただ、音楽が全く聞こえなくなった状態に着目するあまり少し途惑う学習者があるかもしれない。まだ、「聞こえなくなりました。」が言えないからである。

「⑦静かになりました。」は、あくまでも付け足しであり、これを学習者に正解として要求することはできない。これは、PART 2の「れんしゅう」

の「㉔暗くなりました。」という答の後に添えられた「㉕夜になりました。」と同じである。

なお、「静かだ」は状況全体を印象的にとらえる言い方であり、具体的に「音がどうなったか。」という質問に対する反応としては違和感がある。やはり、ここでの問の答としては「㉖小さくなりました。」が自然であり、一旦その問答が終わった後、静かになった部屋で森が窓の外を眺めているシーンを背景に、「音が小さくなりましたね。その結果、どうになりましたか。」とでもいう新しい問を、音声にならない刺激として学習者が感じれば「㉗静かになりました。」が出てくることもあり得る、といった程度のことである。

説明的に添えられた「㉘静かになりました。」で、PART 3の「れんしゅう」は終わり、この映画の全体も終わることになる。

3. この映画での学習項目の整理

この映画では、すでに述べた通り「変化」を表す「なる（変化する）」「する（変化させる）」が主たる学習項目として取り上げられている。この「変化」の自動性、他動性に注目すれば、「なる」「する」は自動詞・他動詞の関係にある。「なる」「する」の他に、この映画には動詞として、

作る 入れる 乾かす 焼く

が表れている。「作る」を除くと、それぞれ、

入れる↔入る 乾かす↔乾く 焼く↔焼ける

のように他動詞・自動詞の対応があるものである。「する」と「なる」は、意味的にはこうした動詞の代表形ともいえよう。「作る」は、しいて対応する自動詞を求めれば、「できる（できている）」であろう。そして「できる」は「する」の可能形でもあるから、「する」と「作る」は意味的に近い関係にある動詞である。事実、フランス語の *faire* や、スペイン語の *hacer* には、「する」「作る」の意味があると、辞書にある。こうした動詞の意味用法の対照研究も興味ある課題である。

ここでは、「なる」「する」の意味・用法について概観し、次に日本語の自動詞・他動詞の問題に簡単に触れ、自動詞・他動詞の対応リストを掲げる。

3.1 「なる」「する」

金田一春彦は、「動詞」(1959,『続日本文法講座1, 文法各論編』 明治書院)で、動詞の意味を次のように10種に分けた。

- (1)存在 アル, イルの類
- (2)存在の変化 現ワレル, 消エルの類
- (3)関係 関スル, 対スルの類
- (4)状態又は属性 (...ガ) デキル, 話セルの類
- (5)状態の変化 成ル, ナオルの類
- (6)属性・状態を帯びること 似ル, ソビエルの類
- (7)動作 話ス, 書クの類
- (8)心理作用 喜ブ, 悲シムの類
- (9)作用 見エル, 聞コエルの類
- (10)自然現象 降ル, 吹クの類

「なる」は、この10種のうち(5)の「状態の変化」を代表する動詞であるが、まず「状態の変化」が10種のうちのひとつに数えられていることに注意したい。このことは、動詞として「なる」が基本的な語であり、また多用される語であることと深く結びついている。

「する」は、多くの動詞を擁する(7)の「動作」の基本動詞ともいうべきものである。「動作」それ自体を表し、目に見える具体的な動作から抽象的な動作まで様々に用いられる「する」は、「なる」と同様に極めて基本的な語であり、また極めて多用される語である。

「なる」と「する」が非常に多用される語であることは、国立国語研究所の各種語彙調査の結果を見るとよくわかる。ここでは便宜上、田中章夫(1978,『国語語彙論』, 明治書院)作成の「各種語彙調査における高頻度語」の

部分を引用する。表中、「なる」と「する」には、★印をつけておいた。なお、Eでは「なる」は13位である。

順位	A 雑誌九十種	B 婦人雑誌	C 総合雑誌	D 朝日新聞	E 新聞3紙
1	★ する	★ する	★ する	★する(体言～)	一
2	いる	★ なる	いる	いる	二
3	言う	こと	言う	ある(形式的)	三
4	一	もの	こと	こと	★ する
5	こと	ある	★ なる	★ なる	万
6	★ なる	よい	その	★ する	五
7	れる・られる	いる	もの	もの	○
8	二	言う	ある	こと	日
9	ある	一	この	的	いる
10	その	その	的	ある	ある

A) 国立国語研究所報告21「現代雑誌九十種の用語用字」

B) 国立国語研究所報告4「婦人雑誌の用語」

C) 国立国語研究所報告12「総合雑誌の用語」

D) 国立国語研究所資料集2「語彙調査—現代新聞用語の一例」

E) 国立国語研究所報告「電子計算機による新聞の語彙調査」(全データの1/3)

「する」は、Eを除くA～Dの語彙調査で高頻度第一位を占める。またEにおいても動詞としては第一位である。「なる」も、動詞としてはBで第二位、A、C、D、Eで第四位と「する」と同様に極めて高い位置にある。

この語彙調査のうちEを材料にして、林四郎は語の「広さ」「深さ」について考察した(1971,「語彙調査と基本語彙」,『国立国語研究所報告39 電子計算機による国語研究Ⅲ』)。林によると使用度数で選ばれた5,417語中、「極めて幅が広く、深さが深いもの」は162語で、そのうち動詞は16語である。動詞として挙げられたものは、次の通りである。「なる」と「する」は、この16語の中に含まれる。

いる ある いう ★なる ★する つく よる いく できる
対する 聞く かける くる 見る とる

(「なる」「する」には、★印をつけた。)

以上、「なる」と「する」の動詞全体の中の意味的位置、また高頻度であるばかりでなく、「広さ」「深さ」の点で極めて基本的な語であることを簡単に見てきた。次に「なる」と「する」それぞれの意味・用法を概観する。

「なる」には、「状態の変化」を表す他に次のような用法がある。

〔41〕和歌山県は、たくさんみかんがなる。

〔42〕この日本語教科書は、30課からなる。

〔41〕は植物が実を結ぶことをいい、今までなかったものが新たに形としてそこに生じる、という意味で、「発生」である。〔42〕は、組み立てられている、そうできている、という意味で「成立」である。「なる」は、『分類語彙表』（1964,『国立国語研究所資料集6』）では「成立・発生」に分類されているが、それは「なる」のこうした意味、用法が基本と考えられたからであらう。

2. で度々述べたように「状態の変化」は、

$$\left. \begin{array}{l} \text{(名)} \\ \text{(形動・語幹)} \\ \text{(形・連用形, 「____く」)} \end{array} \right\} + \text{「に」} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{(名)} \\ \text{(形動・語幹)} \\ \text{(形・連用形, 「____く」)} \end{array}} \right\} + \text{「なる」}$$

の形で表される。この型に習熟することが、この映画での大きなねらいである。

〔43〕氷が水になる。

〔44〕部屋が静かになる。

〔45〕音が大きくなる。

〔43〕は、氷という状態から水という状態に変化することを表し、「状態の変化」をよく示す例である。「何になったか。」という問に対する答だとすれば、「水になった」と変化の結果もしくは到達点を表す。〔44〕は、部屋が静かな状態に、〔45〕は、音が大きい状態に達したことを表している。「どう

なったか。」という問に対する答だとすれば、「静かになった」「大きくなった」と変化の“しかた”や“方向”を表す。

〔46〕二十才になる。

〔47〕全部で100枚になる。

〔46〕は、二十才という時期に、〔47〕は、100枚という数量に達したことを表す。「あれから五年になる。」「来年からラーメンが400円になる。」なども同様の例である。

〔48〕朝になる。

〔49〕春になる。

〔50〕五時になる。

朝、昼、夜など、一日における自然変化、また季節の変化も「なる」で表わされる。これに類したものにある時刻に達したことをいう〔50〕の言い方がある。これらの表現には特徴が二つある。(1)ふつう、ガ格なしで表現される。(2)ふつう、「なる」に対応する「する」の言い方がない。〔46〕のある時期に達した、という言い方は、「なる」に対応する「する」の言い方がないが、しかし自然現象の言い方と違って、ガ格を想定することができる。〔50〕の例は、「時刻が」というガ格の想定に問題がなければ、〔46〕の同類と考えることもできる。「なる」と「する」の対応については、後に簡単に触れる。

〔51〕日本語の勉強がためになった。

これは半ば慣用的な表現で、役に立つ、の意味である。同様のものに「薬になる」や「毒になる」などがある。

「する」は、先にも触れた通り動作一般を表すのに用いられ、他動詞としての用法から自動詞としての用法まで幅広い用法がある。「する」の意味・用法を詳しく述べたものに『婦人雑誌の用語』（1953、『国立国語研究所報告4』）、『基礎日本語』（1977、森田良行、角川書店）がある。前者では、どちらかといえば「する」と他の語の結びつきにより形態的に整理・分類されているが、後者では、大枠を骨格文型で分類して、意味・用法の説明をしてい

る。ここでは、『基礎日本語』の「する」の説明にしたがって「する」の意味・用法を見ていく。『基礎日本語』では、「する」に対応する「なる」の用法についても述べているので、対応する用法のあるところには、(a)(b)……の印をつけ、後にそれに触れる。

まず、骨格文型は次の八つである。

- (1) AハCヲする
- (2) BニCヲする
- (3) CヲDニする
- (4) ……CヲEニする
- (5) ……ガする
- (6) ……トする
- (7) ……ハ……数量……する
- (8) ……ハ……ニする

(1)は、状態・行為、意志的・無意志的の組み合わせにより、更に四つに分類されている。

まず、状態を表す無意志的な「する」。

〔52〕 かわいい顔をした赤ちゃん

〔53〕 ぜいたくな服装をした貴婦人

〔54〕 激しい気性をしている。

〔55〕 いい生活をしている。

〔56〕 赤い屋根をした建物。

〔52〕 は、「対象とする人や動物の身体部分がある様相を呈していること」を述べている。〔53〕 は、「格好、様子、表情、態度などの外観・外見に現れた特徴」を、〔54〕 は、「主体が所有する固有の性質、様相」を表す。〔55〕 は、「主体の生活のようす」。〔56〕 は、対象が物である場合の「外観に現れた特徴を述べたもの」。

次に、行為を表す無意志的な「する」。

〔57〕 息をする。

〔58〕 けがをする。(a)

〔59〕 注射をする。

〔57〕 は、「生理的な現象」を言い、〔58〕 は、「肉体的経験や病歴となるような“傷病”」を言い、〔59〕 は、「医療を受けるの意」である。

次は、行為と状態を表す意志的な「する」。

〔58〕 ネクタイをする。

これは、「装身具などを身につけることを表す」。

最後に、行為を表す意志的な「する」。

〔59〕 先生をする。(b)

〔60〕 いたずらをする。

〔61〕 クラス会をする。

〔59〕 は、「ある任務、役職、職業につく」ことを、〔60〕 は、「日常の動作・作用・活動」を、〔61〕 は、「グループの行為」を、それぞれ表す。

(2)～(8)の文型には、次のような例がある。

〔60〕 彼女に電話をする。……(2)の文型

〔61〕 息子を医者にする。(c)……(3)の文型

〔62〕 いやな噂を耳にする。……(4)の文型

〔63〕 音がする。……(5)の文型

〔64〕 匂いがする。…… //

〔65〕 寒けがする。…… //

〔66〕 気がついて、はっとした。(d)……(6)の文型

〔67〕 一個が千円もする。……(7)の文型

〔68〕 五年すると、…… //

〔69〕 新婚旅行は、ハワイにしよう。……(8)の文型

以上のうち、(1)～(4)の文型の「する」が他動詞、(5)～(8)の文型の「する」が自動詞である。「なる」と対応する「する」は、その両者にまたがっている。順に見ていく。(○は、言える。×は、言えない。)

(a)について……「傷害、病氣、治療には『……をする』が使えるが、自動

詞『……になる』は病気の場合しか使えない」と説明されている。

〔70〕骨折をする(○), 骨折になる(×)……傷害

〔71〕結核をする(○), 結核になる(○)……病気

〔72〕手術をする(○), 手術になる(×)……治療

(b)について……「……になる」は役職・身分・職種に広く使用できるが,
「……をする」は用法が限られる, と説明されている。

〔73〕大学生をする(×), 大学生になる(○)

〔74〕教育者をする(×), 教育者になる(○)

「……になる」が使えない場合もある。

〔75〕店をする(○), 店になる(×)

〔76〕レストランをする(○), レストランになる(×)

ただし, 「××屋」は「××屋をする」「××屋になる」の両形が可能。

〔77〕運送屋をする(○), 運送屋になる(○)

(c)について……これは, この映画の学習主題である変化をさせるという意味の「する」の文型である。

〔77〕息子を医者にする(○), 息子が医者になる(○)

〔78〕肌を白くするクリーム(○), 肌が白くなるクリーム(○)

度々触れたように変化させることを表す文型のヲ格は, 「……=なる」の文型では, ガ格となる。このガ格をふつうは欠き, 「する」の言い方をもたないものは, 自然現象をいう「なる」である。これも度々触れたことである。

〔79〕朝にする(×), 朝になる(○)

〔80〕春にする(×), 春になる(○)

ただし, 2. で触れたように自然現象に「する」を用いる例もある。(p. 26)

〔81〕神様, 早く朝にして下さい。

〔82〕照る照る坊主, 照る坊主, あした天気にしておくれ。

なお, (4)の文型は, 「耳にする」「口にする」「手にする」といった熟語的なもので, ニ格は人体の部分等, 場所にかかわっていて, 変化を表す文型で

はないから、対応する「……=なる」の文型はない、とされる。

変化を表す(3)の文型は、「なる」の場合と同じように、

(名)
(形動・語幹) } + 「に」 } + 「する」
(形・連用形, 「____く」)

の型となる。そして「何をしたか」「どうしたか」という問の答を想定すると、「名詞+にする」では変化の“結果”や“到達点”を、「形容詞(____く)+する」,「形容動詞+にする」では変化の“しかた”や“方向”を表す。これも「なる」の場合と同様である。

(d)について……「……トする」「……トなる」両形可能とされている。

〔83〕はっとする(○), はっとなる(○)

〔84〕かっとする(○), かっとなる(○)

以上、「なる」「する」の意味用法について概観した。この他、「する」には複合動詞としての用法の問題があるが、ここでは触れない。「なる」「する」は、この日本語教育映画基礎篇では次のように学習が発展する。

◎「____ことになる」「____ことにする」(十六課「みずうみのえを かい たことが ありますか」で)

◎「____ようになる」(十七課「あのいわまで およげますか」で)

◎「____(よ)うとする」(二十四課「おかねを とられました」, 二十五課「あめにふられて こまりました」で)

◎「お____になる」「お____する」(二十九課, 三十課で)

意志決定を表す「____にする」は、映画中には次のような用例がある。

〔85〕どのお花にしましょうか。(「おみまいに いきませんか」—㉔)

〔86〕何にしましょうか。(「よみせを みに いきたいです」—㉗)

ここで「なる」「する」概観のしめくくりとして、表現論の立場から見た「なる」「する」論を簡単に紹介したい。寺村秀夫は、『ナル』表現と『スル』表現——日英『態』表現の比較——(1976, 国語シリーズ別冊4 『日本語と日本語教育——文字・表現編——』, 国立国語研究所)で、英語、日本

語を比較して次のように言っている。

「表現的には、英語は『スル』(略)という表現を好むのに対し、日本語は、できるかぎり『ナル』表現をとることを好む体質をもっている」

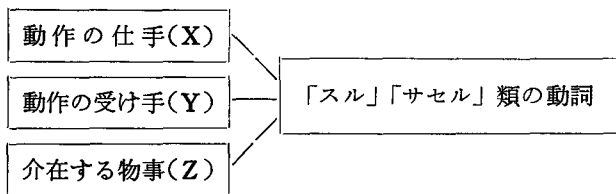
このことは、寺村の論点を要約すると、

◎英語……事象の「原因」に基点を置く表現を好む言語

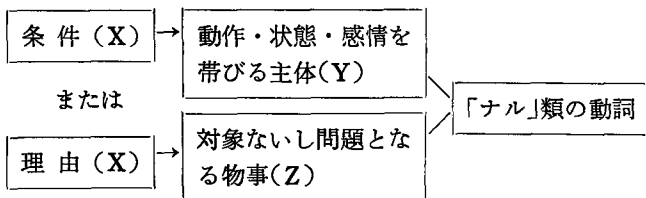
◎日本語……事象の「結果」、「現在の状態そのもの」に基点を置く表現を好む言語

となる。寺村の「『表現の比較』ということ」(1975, 国語シリーズ別冊3『日本語と日本語教育——発音・表現編——』)では、次のような図式がある。

英語：



日本語：



〔87〕先生のおかげで、日本語が話せるようになりました。

〔88〕法律の勉強のために日本へ行くことになりました。

といった文を考えると寺村の論はうなずけるものである。自分の主体的努力、また意志による決定であっても、そう状態が変化した、結果として現在はこうである、と述べる。

この寺村の論を更に進めると「なる」と「する」の表現類型は、言語類型の問題に進み、文化類型の問題にいきつく。

「＜する＞的と＜なる＞的ということ——これは単に言語についてだけ見られる類型なのであろうか」

という問題提起——それは当然「する」と「なる」の比較を出発点としているわけだが——をしているのは、池上嘉彦の『「する」と「なる」の言語学』（1981、大修館）である。池上は言う。

「＜する＞的＜なる＞的というような『言語類型』——つまり、＜動
作主＞を際立たせて表現しようとする言語とそれをなるべく覆い隠し
て表現しようとする言語という対立——が想定できるとしたら、それ
と平行するような『文化の類型』も認めることができるのであろう
か。」

池上のいう言語類型は、Do-language と Become-language の比較が基点であり、同時に前者は Have-language であり、後者は Be-language であるまいか、という想定に結びつく。このことにここではこれ以上深入りできないが、日本語学習者の言語類型がどういうものであるかは、日本語との対照で出来る限り理解しておく必要がある。言語類型に基づく発想の違いを指摘できれば、文型による基本的なものの言い方でも、また学習者が自分の言い分を日本語で言う場合でも、日本語としての、日本文化としてのコンテキストに則さねばならないことに理解の目を向けられよう。寺村の論も池上の論も言葉並べの日本語教育から表現としての、文化としての日本語教育を考えていく場合、刺激的である。

3.2. 自動詞・他動詞

先にあげた、

入る⇔入れる 乾く⇔乾かす 焼ける⇔焼く

の自動詞・他動詞は、次のように自動詞文他動詞文を作る。

- [89] { a. 風が入る。
 b. 風を入れる。
- [90] { a. ハンカチが乾く。
 b. ハンカチを乾かす。
- [91] { a. 魚が焼ける。
 b. 魚を焼く。

注目すべきことは、[89]～[91]の他動詞文では、他動詞の働きかけの対象となり、ヲ格で表されていたものが、自動詞文では、ガ格となり、主格になっていることである。また「入る」「入れる」を別にすると、「乾く」「乾かす」「焼ける」「焼く」には自他の派生対応の関係が認められることである。

kawak (乾) $\begin{cases} u & (\text{自}) \\ asu & (\text{他}) \end{cases}$ yak (焼) $\begin{cases} eru & (\text{自}) \\ u & (\text{他}) \end{cases}$

自動詞・他動詞の派生対応については、後に動詞のリストを掲げる。ここではまず、自動詞(文)・他動詞(文)をめぐって今まで問題にされてきたことや関連事項を簡単に述べる。

(a) 自動詞・他動詞を文法的に認める必要があるかどうか

まず、ヲ格を取るものが必ずしも他動詞ではないという問題がある。格助詞「を」は、動作の働きかけの対象となるものを示すばかりでなく、「東京を離れる」「空を飛ぶ」のように出発点、経過点を示し、自動詞とともに用いられる。

次に「雨に降られた」「子供に泣かれた」のように自動詞文も受け身文になるという問題がある。

こうした点から自動詞・他動詞を文法上分けることは、余り意味がないという論が成り立ち、様々に議論されてきた。こうした文法論は別として、日本語教育の観点からは、自他の派生対応をする動詞が少なからずあること、そして意味の区別ができることに注目する必要がある。そしてこの意味の区別というのは、先に触れた自動詞のガ格と他動詞のヲ格の構文上の対応に結びつくものであることにも注意を向けなくてはならない。こうした構文上の問題

も含め自動詞・他動詞を論じたものには、奥津敬一郎の「自動化・他動化および両極化転形——自他動詞の対応——」（1967、『国語学』70）がある。

また、自他の派生対応をする動詞には「自動詞＋ている」「他動詞＋てある」の形で動作・作用の結果状態を表せるもののがかなり存在する。このことも日本語教育上大事な問題である。

- [92] { a ハンカチが乾いている。
 b ハンカチが乾かしてある。

- [93] { a 魚が焼けている。
 b 魚が焼いてある。

この「____ている」「____てある」の表現上のニュアンスの差や、その他の問題については『日本語教育映画解説12 そうじはしてありますか』を参照のこと。

(b) 漢語サ変動詞の問題

漢語サ変動詞には、自他の用法のあるものと自動用法のみのものがある。以下は、鈴木丹士郎のあげている例である。（1972、「動詞の問題点」『品詞別文法講座3 動詞』、明治書院）

- ◎自他の用法がある……混同する，再任する，集中する，終了する，増加する，分泌する
- ◎自動用法のみある……参加する，変貌する，発足する，来般する，流行する

後者のものを他動詞用法にするには、「させる」などの語を付ける必要がある。

(c) 自動詞・他動詞を広く態の中で考える必要性

『岩波国語辞典』（1979 西尾実他 第三版）の「品詞概説」によると、自動詞・他動詞は、意味的には二種のものがある。

- ◎自一1（自然にそうなる）……見える，聞こえる，老いる，など
- ◎自一2（みずからそうする）……行く，寝る，など
- ◎他一1（AがBに対してBにそういう行為をする）……見る，着る，など

◎他－２（ＡがＢに対してＢが行為するようにし向ける）……見せる，着せる，寝せる，寝かす，生かす，など

「自－１」は，金田一春彦（1957，「時・態・相および法，」『日本文法講座 1 総論』，明治書院）のいう「中相動詞」や，三上章（1972，『現代語法序説』，くろしお出版）のいう「所動詞」と重なるところのあるもので，「そうする」ではなく「そうなる」の意味を表す動詞である。金田一の指摘するように，この「自－１」に含まれる日本語の動詞はたくさん存在し，また「自－２」が受動態になると違って，受動態を作らないことで注目になる。「他－１」「他－２」も受動態になるから「自－１」だけが別ということになる。

「他－２」は，使役性の他動詞である。「せる」「させる」を取る使役態との連関で考察する必要がある。受動態，使役態については，これから先刊行するこの映画解説書で解説することになるが，ここでの問題は，自動詞・他動詞の派生対応も上の動詞の四分類に複雑にまたがっていることである。

『岩波国語辞典』の「語構成概説」から引用すると次のようである。

自－１	自－２	他－１	他－２
伝わる	伝う	伝える	
うもれる	うまる	うめる	
見える		見る	見せる
抜かる	抜ける	抜く	抜かす
泣ける	泣く		泣かす
	焼ける	焼く	
	生きる		生かす

これと同種の自動詞・他動詞の派生布置表を，鈴木丹士郎は上記論文「動詞の問題点」（1972）で試みている。また併存する自動詞・他動詞の意味を須賀一好は検討している（1980，「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学』）

(d) 自動詞の派生について

「受ける」対「受かる」「勤める」対「勤まる」などは、前者が「-eru」を持つ他動詞、後者が「-aru」を持つ自動詞として派生対応の関係にある。西尾寅弥(1954,「動詞の派生について——自他対立の型による——」,『国語学』17)によると「-eru」タイプの他動詞から「-aru」タイプの自動詞の派生は、「現在において、また国語史上においても、かなり活発に働いていると考えられる」。この結果、次のような自他の対応が出てくるようになる。

あける(他) — あ く (自) やめる(他) — や む (自)
 \ あかる (自) \ やまる (自)

並べる(他) — 並 ぶ (自) 沈める(他) — 沈 む (自)
 \ 並ばる (自) \ 沈まる (自)

「-aru」タイプの自動詞には、語として熟していないものもあるのは、西尾の説明によれば当然のこととなるが、それよりも問題は、「-aru」タイプの自動詞が派生することにより自動詞二形が併存することになることである。併存する自動詞二形を比べると「-aru」タイプの自動詞は、先に触れた中相動詞的意味合いを持つ。つまり、簡単に言えば、自然にそうなるという意味合いの自動詞形を作る力が、現在においても「活発に働いている」ということである。これは日本語の「なる」「する」を考える上でも、もうひとつの興味ある問題である。

なお「勤まる」などは、今度は日本語の可能態との連関で考える必要がある。

(e) 自然現象を表す動詞

石綿敏雄の「自然現象を意味する動詞の用法」(1973,『国立国語研究所論集4 ことばの研究4』)に次のような指摘がある。

「1. 自然現象は全体としては自動詞を基調として表現される」

「2. 同じ自動表現でも『火が燃える』と『まきが燃える』のように自然現象そのものが主語になるものと、動作が行なわれているものが主語になるものがある」

たとえば、以下にあげるような文例がある外国語ではどう表現するか、比

較対照してみるのは興味ある課題である。

- [94] { a. 雨です。
 b. 雨が降る。
 c. 雨になる。
- [95] { a. 朝です。
 b. 朝になる。
- [96] { a. 暑いです。
 b. 暑くなる。
- [97] { a. 火を燃す。
 b. 火が燃える。
 c. まきが燃える。
- [98] { a. 火を消す。
 b. 火が消える。
 c. ガスが消える。

3.3 自動詞・他動詞の派生対応リスト

以下の自他の派生対応リストは、石井久雄の「自動詞と他動詞との派生対応」(1982(予),「プログラム教材<資料>」, 国立国語研究所)に拠るものである。石井作成の「派生対応」リストは、日本語教育の観点からは次の二点で大変有益である。

- (1) 派生対応の関係にある動詞例が広く集められていること。
- (2) 自動詞文ではガ格となり、他動詞文ではヲ格となる同一名詞が添えられていること。つまり、ガ格、ヲ格の対応を考慮しながら自動詞・他動詞が文単位で考えられていること。

引用にあたっては、わずかだが、日本語教育の観点から次のような手を加えた。

- (1) 動詞例が日本語として余り熟していないと判断し、除いたものがある。
- (2) 自動詞・他動詞の取る同一名詞の想定に多少無理があると判断した場合、名詞を省略している。また、別の名詞に置き変えたものもある。
- (3) 「常用漢字表」をほぼ基準にして、かな書きにしたものがある。

「派生対応」リストに用いられている記号は、次の通りである。

- = 自動詞・他動詞の共通部分（の一部）。
- C 自動詞・他動詞の共通部分で、子音の最後のもの。
- j ヤ・ユ・ヨ（・イ・エ）の子音。i, e の直前では消失。
- w ワ（・イ・ウ・エ・オ）の子音。i, u, e, o の直前では消失。
- 左が自動詞，右が他動詞。
- * 左が自動詞に対して格助詞ガ，他動詞に対して格助詞ヲ。

(a) 同形の自動詞=C(V)と他動詞=C(V)

1. 自動詞 =C —他動詞 =C 門ガ開く=k—門ヲ開く=k
 水*注ぐ—注ぐ 数*増す—増す 事*運ぶ—運ぶ
 実*結ぶ—結ぶ 店*休む—休む 答*誤る—誤る
 根*張る—張る 話*終わる—終わる 答*間違う—間違う
 危険*伴う—伴う

2. 自動詞 =Ce —他動詞 =Ce 人ガ寄せる=Se—人ヲ寄せる=Se
 枝*垂れる—垂れる 指*触れる—触れる

3. 自動詞 =Ci —他動詞 =Ci 門ガ閉じる=Zi—門ヲ閉じる=Zi

(b) 自動詞=C(V) と他動詞=C(V)

4. 自動詞 =C —他動詞 =Ce 門ガあく=k—門ヲあける=ke
 人*しりぞく—しりぞける 色*付く—付ける 後*続く—続ける
 軸*傾く—傾ける 郵便*届く—届ける 顔*向く—向ける
 痛み*やわらぐ—やわらげる 物*立つ—立てる 子*育つ—育てる
 船*浮かぶ—浮かべる 駒*並ぶ—並べる 腰*屈む—屈める
 人*苦しむ—苦しめる 形*ゆがむ—ゆがめる 心*慰む—慰める

丈*縮む—縮める 列*進む—進める 手*休む—休める
 船*沈む—沈める 顔*赤らむ—赤らめる 思い*潜む—潜める
 足*痛む—痛める 気*ゆるむ—ゆるめる 湯*ぬるむ—ぬるめる
 形*違う—違える 準備*整う—整える 調子*そろう—そろえる
 供*従う—従える 願い*かなう—かなえる

5. 自動詞 =Ce 一他動詞 =C 道^{みち}が開ける=ke—道ヲ開く=k
 刃*欠ける—欠く 布*裂ける—裂く 足*くじける—くじく
 *頂ける—頂く 砂糖*とける—とく ご飯*たける—たく
 石*砕ける—砕く 紙*破ける—破く 品物*さばける—さばく
 歯*抜ける—抜く 服*脱げる—脱ぐ 皮*むける—むく
 家*焼ける—焼く 羽*もげる—もぐ 気*もめる—もむ
 品*売れる—売る 手*切れる—切る 紙*ちぎれる—ちぎる
 枝*折れる—折る すそ*まくれる—まくる 腕*ねじれる—ねじる
 体*よじれる—よじる 真実*知れる—知る ページ*めくれる—めくる
 手*こすれる—こする 魚*釣れる—釣る あご*しゃくれる—しゃくる
 紙*破れる—破る 氷*割れる—割る 取っ手*取れる—取る
 糸*よれる—よる ゆりかご*揺れる—揺る *思える—思う

6. 自動詞 =Ci 一他動詞 =Ce 手が伸びる=bi—手ヲ伸べる=be

(e) 自動詞=Car(e) と他動詞=C(V)

7. 自動詞 =Car 一他動詞 =C 線がつながる=gar—線ヲつなぐ=g
 穴*ふさがる—ふさぐ 棘*刺さる—刺す 水かさ*増さる—増す
 心*合わさる—合わす *つかまる—つかむ 物*はさまる—はさむ
 傘*たたまる—たたむ *くるまる—くるむ

8. 自動詞 =Car —他動詞 =Ce 人ガ助かる=kar—人ヲ助ける=ke

金*もうかる—もうける	絵*掛かる—掛ける
頭*ぶつかる—ぶつける	大根*漬かる—漬ける
荷*乗っかる—乗っける	
値段*下がる—下げる	値段*負かる—負ける
値段*上がる—上げる	
線*曲がる—曲げる	事業*広がる—広げる
手*合わさる—合わせる	水*混ざる—混ぜる
歲月*隔たる—隔てる	
卵*ゆだる—ゆでる	
紙*重なる—重ねる	車*連なる—連ねる
穴*埋まる—埋める	
体*屈まる—屈める	地位*高まる—高める
理解*深まる—深める	
計画*決まる—決める	評価*低まる—低める
国*治まる—治める	
戸*しまる—しめる	会議*始まる—始める
味*薄まる—薄める	
騒ぎ*静まる—静める	体*休まる—休める
色*染まる—染める	
水*たまる—ためる	地盤*固まる—固める
法*定まる—定める	
体*暖まる—暖める	法律*改まる—改める
差*縮まる—縮める	
たけ*詰まる—詰める	人*集まる—集める
車*止まる—止める	
役*勤まる—勤める	人*留まる—留める
話*まとまる—まとめる	
戸*はまる—はめる	間*狭まる—狭める
傘*すぼまる—すぼめる	
足*早まる—早める	水*清まる—清める
力*強まる—強める	
糸*からまる—からめる	*くるまる—くるめる
形*丸まる—丸める	
噂*広まる—広める	規則*ゆるまる—ゆるめる
力*弱まる—弱める	
残忍*極まる—極める	木*植わる—植える
授業*終わる—終える	
様子*変わる—変える	*交わる—交える
目*すわる—すえる	
数*加わる—加える	話*伝わる—伝える
品 ^{ひん} *備わる—備える	

9. 自動詞 =Cor —他動詞 =Ce 心ガこもる=mor—心ヲこめる=me

10. 自動詞 =Care —他動詞 =C 子ガ生まれる=mare—子ヲ生む=m

皮*はがれる—はぐ

11. 自動詞 =Care—他動詞 =Ce 枝ガ分かれる=kare—枝ヲ分ける=ke

12. 自動詞 =Core—他動詞 =Ce 物ガ埋もれる=more—物ヲ埋める=me

13. 自動詞 =Co e—他動詞 =C 音ガ聞こえる=ko e—音ヲ聞く=k

14. 自動詞 =Ci e—他動詞 =Ci 物ガ見える=mi e—物ヲ見る=mi

魚*煮える—煮る

(d) 自動詞=C(V) と他動詞=Cas(e)

15. 自動詞 =C—他動詞 =Cas 物ガ動く=k—物ヲ動かす=kas

費用*浮く—浮かす のり*利く—利かす 腹*すく—すかす

人*せく—せかす 子*泣く—泣かす 旗*たなびく—たなびかす

目*輝く—輝かす 頭*働く—働かす 胸*ときめく—ときめかす

湯*沸く—沸かす 洗濯物*乾く—乾かす 勇名*とどろく—とどろかす

人*急ぐ—急がす 葉*そよぐ—そよがす 基礎*ゆるぐ—ゆるがす

世間*騒ぐ—騒がす 土地*遊ぶ—遊ばす 順番*飛ぶ—飛ばす

兵*忍ぶ—忍ばす 人*転ぶ—転ばす 顔*ほころぶ—ほころばす

人*励む—励ます 心*澄む—澄ます 勘定*済む—済ます

表面*へこむ—へこます 問題*からむ—からます 目*くらむ—くらます

夢*ふくらむ—ふくらます 人*参る—参らす 先*とがる—とがらす

目*光る—光らす 思い*めぐる—めぐらす 趣向*凝る—凝らす

水*濁る—濁らす 肉*腐る—腐らす 車*走る—走らす

板*そる—そらす

血*したたる—したたらす 毒*散る—散らす *鳴る—鳴らす

実*なる—ならす 雨*降る—降らす 数*減る—減らす

足*滑る—滑らす 人*眠る—眠らす 水*もる—もらす

顔*曇る—曇らす	店*はやる—はやらす	調子*合う—合わす
香水*匂う—匂わす	人心*惑う—惑わす	心*通う—通わす
雰囲気*漂う—漂わす	心*迷う—迷わす	順番*狂う—狂わす

16. 自動詞 =C 一他動詞 =Cos 力ガ及ぶ=b—力ヲ及ぼす=bos
 国*滅ぶ—滅ぼす

17. 自動詞 =C 一他動詞 =Case 顔ガ合う=w—顔ヲ合わせる=wase

18. 自動詞 =Ce 一他動詞 =Cas 塩ガとける=ke—塩ヲとかす=kas

夜*明ける—明かす	物*欠ける—欠かす	話*聞ける—聞かす
*透ける—透かす	人*泣ける—泣かす	腰*抜ける—抜かす
芋*ふける—ふかす	色*ぼける—ぼかす	敵*負ける—負かす
肌*ふやける—ふやかす	形*ぼやける—ぼやかす	*とろける—とろかす
魚*焦げる—焦がす	獲物*逃げる—逃がす	塗料*はげる—はがす
樽*ころげる—ころがす	物*出る—出す	目*覚める—覚ます
熱*冷める—冷ます	病気*いえる—いやす	財産*費える—費やす
馬*肥える—肥やす	火*絶える—絶やす	ひげ*はえる—はやす
ビール*冷える—冷やす	数*ふえる—ふやす	火*燃える—燃やす
庭*荒れる—荒らす	木*枯れる—枯らす	足*疲れる—疲らす
品*切れる—切らす	気*まぎれる—まぎらす	日*暮れる—暮らす
時間*遅れる—遅らす	*ふくれる—ふくらす	真相*知れる—知らす
人*じれる—じらす	位置*ずれる—ずらす	話*それる—そらす
幕*垂れる—垂らす	毛*ちぢれる—ちぢらす	大*なれる—ならす
着物*濡れる—濡らす	目*はれる—はらす	疑惑*晴れる—晴らす
嘘*ばれる—ばらす	ご飯*むれる—むらす	秘密*もれる—もらす
犬*じゃれる—じゃらす	体*震える—震わす	

19. 自動詞 =Ci 一他動詞 =Cas ガ生きる=ki 一ヲ生かす=kas
 人*飽きる一飽かす 愛想*尽きる一尽かす 門*閉じる一閉ざす
 水*満ちる一満たす 手*伸びる一伸ばす
 つぼみ*ほころびる一ほころばす 薬*しみる一します
 人*こりる一こらす

20. 自動詞 =Ci 一他動詞 =Cos 人が起きる=ki—人ヲ起こす=kos
 時*過ぎる一過ごす 物*落ちる一落とす 国*滅びる一滅ぼす
 人*降りる一降ろす

21. 自動詞 =Ci 一他動詞 =Cus カガ尽きる=ki—カヲ尽くす=kus

22. 自動詞=Ce 一他動詞=Case 気がまぎれる=re—気ヲまぎらせる=rase

23. 自動詞 =Ce 一他動詞 =Cese 子が寝るne—子ヲ寝せるnese

24. 自動詞 =Ci 一他動詞 =Cise 声が似るni—声ヲ似せる nise

25. 自動詞 =C 一他動詞 =Cakas
 紙くずガ散る=r—紙くずヲ散らかす=Cakas
 糸*こんがる—こんがらかす

26. 自動詞 =Ce 一他動詞=Cakas ガ冷える=je—ヲ冷やかす=jakasu
 人*おびえる—おびやかす 子*甘える—甘やかす

27. 自動詞 =Ce—他動詞=Cawas
 気がまぎれる=re—気ヲまぎらす=rawas

28. 自動詞 Ce—他動詞Cekas(e)

子ガ寝るne—子ヲ寝かす(せる) nekas(e)

(e) 自動詞=r(e) と他動詞=s(e)

29. 自動詞=r— 他動詞=s

火ガ起こる=r—火ヲ起こす=s

客*帰る—帰す

定説*くつがえる—くつがえす

旗*ひるがえる—ひるがえす

道*通る—通す

故障*直る—直す

糸*こんがらかる—こんがらかす

ごみ*散らかる—散らかす

ボール*転がる—転がす

水*濁る—濁す

問題*残る—残す

判決*下る—下す

物*浸る—浸す

物*渡る—渡す

位置*移る—移す

物*戻る—戻す

事*なる—なす

物*余る—余す

つた*からまる—からます

物*しめる—しめす

火*ともる—ともす

30. 自動詞 =r —他動詞 =Se

客ガ乗る=r—客ヲ乗せる=Se

波*寄る—寄せる

31. 自動詞 =r —他動詞 =e

車ガつかまる=r —車ヲつかまえる=e

32. 自動詞 =re —他動詞 =s

姿ガ隠れる=re—姿ヲ隠す=s

物*倒れる—倒す

物*汚れる—汚す

水*流れる—流す

糸*ほぐれる—ほぐす

山*くずれる—くずす

鍵*はずれる—はずす

体*やつれる—やつす

物*つぶれる—つぶす

*現れる—現す

33. 自動詞 =ri —他動詞 =s

用ガ足りる=ri—用ヲ足す=s

34. 自動詞 =re 一他動詞 =t ガ分かれる=re—ヲ分かつ=t

35. 自動詞 =re 一他動詞 =k 紙が破れる=re—紙ヲ破く=k

36. 自動詞 =re 一他動詞 =se 背がもたれる=re—背ヲもたせる=se

37. 自動詞 =w 一他動詞 =s 田が潤う=w—田ヲ潤す=s

38. 自動詞 =w 一他動詞=se 街がにぎわう=w—街ヲにぎわせる=se

39. 自動詞 =je 一他動詞 =s 火が燃える=je—火ヲ燃す=s

40. 自動詞 Ci e 一他動詞 Ces 火が消えるki e—火ヲ消すkes

41. 自動詞 Ci e 一他動詞 Cise 物が見えるmi e—物ヲ見せるmise

4. 練習問題

教室で行う練習が、学習目的、学習段階、学習環境などによって異なることはいうまでもない。したがって、ここに示す練習問題は、あくまでもひとつの参考例であり、形式、使用語彙などは、実際に練習を行う教師がより適切なものを工夫することが望ましい。

ここでの構成は、以下の通りである。

I. 絵を使用する練習について

II. 文型練習例

A. 「なる」

1. 形 容 詞
2. 名 詞
3. 形容動詞
4. 混 合

B. 「する」

1. 形 容 詞
2. 形容動詞
3. 混 合

C. 「なる」「する」の混合

D. 決定・選択を表す「___にする」

E.

1. 「___ことになる」
2. 「___ことにする」

F.

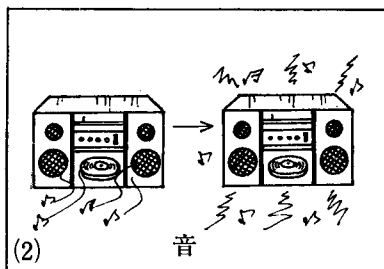
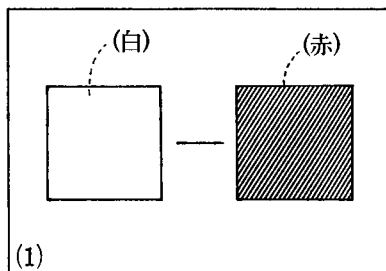
1. 「___ようになる」
2. 「___ようにする」

G. 自動詞・他動詞

I. 絵を使用する練習について

視覚でとらえた対象を言葉で表現することが基本的な言語表現のひとつであることを考えると、教室において、視覚教材としての絵や写真などを説明させたり、それについて問答を行ったりすることは、きわめて自然で、かつ有効な練習であるということができよう。とくに映画を視聴させた後の練習であるので、それを“強化”させる意味でも絵などを使った効果的な練習を工夫したいものである。そのための参考として、ここでは一例を示しておくことにする。

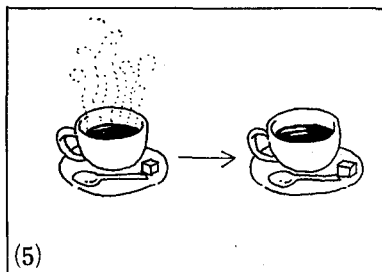
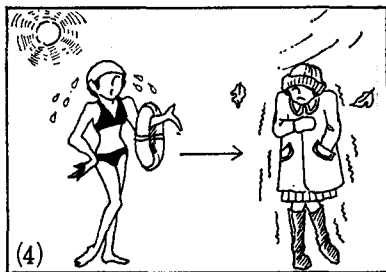
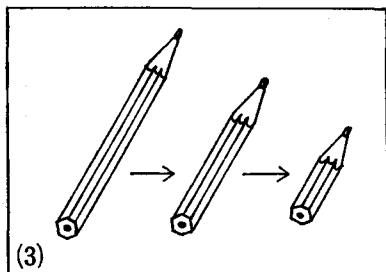
1. まず、誰でも行っている素朴な練習だが、「形容詞＋なる」の基本的語法を身につけさせるには、はっきりした色の変化を、実際の色を使って示すことである。(1)のように厚紙に二色示し、矢印をつけるだけでも、これを練習のための約束ごととして「赤くなりました。」と言わせ、用意した絵を次々にかえることにより、「黒くなりました。」「青くなりました。」「白くなりました。」などと続け、「連用形＋なる」の定着をはかることができる。



習のための約束ごととして「赤くなりました。」と言わせ、用意した絵を次々にかえることにより、「黒くなりました。」「青くなりました。」「白くなりました。」などと続け、「連用形＋なる」の定着をはかることができる。

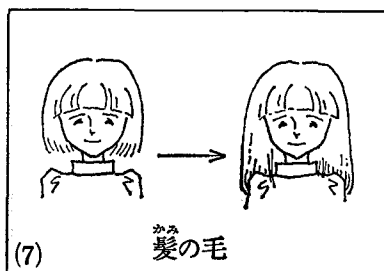
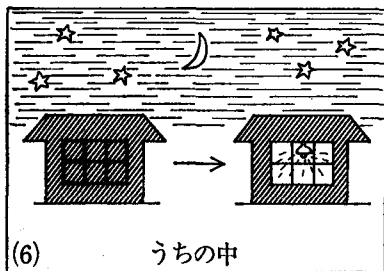
2. 次に、練習の約束ごとに慣れたところで、(2)のような絵を見せる。映画に関連した絵でもあるから、絵は上手でなくてもポイントさえおさえておけば、学習者は何か言いたくなるものである。「大きくなりました。」などの反応が返ってくれば理想的である。絵の

中央下に「音」と書いてあるが、「ステレオの音」でも「ジャズの音」でもよい。これは、「何が」を問題にして問答するときのためのヒントであり、やはり約束ごとである。

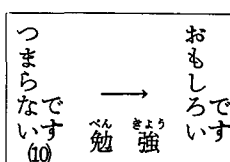
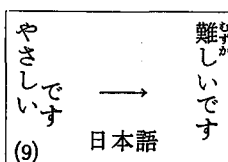
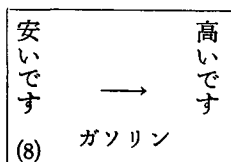


以下同様の考え方で、(3)「(エンピツが) 短くなりました。」、(4)「寒くなりました。」、(5)「(コーヒー)が冷たくなりました。」などいろいろな工夫することができよう。絵だけでは反応をひとつにしぼることが難しいような場合には、先の(2)のように中央下に必要

な情報を書けばよい。これは、適確な表現を導き出すためのcueでもある。(6)の「うちの中が明るくなりました。」や(7)の「髪の毛が長くなりました。」などはその例である。

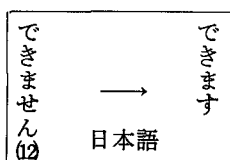
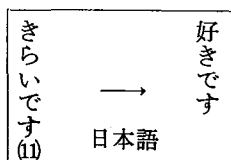


そして、この練習の約束ごと（ルール）に十分慣れたら、絵のかわりに、すべて文字で必要な情報を与えても、与えられた事柄（事実関係）を口頭で表現するという練習を続けることはできる。

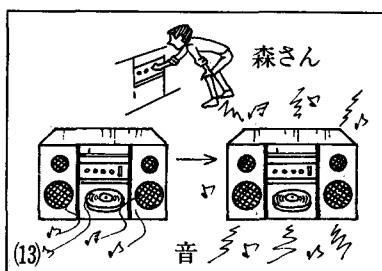


(8) 「ガソリンが高くなりました。」、(9)「日本語が難しくなりました。」、(10)「勉強がおもしろくなりました。」のように、絵で描き表すのが難しいような事柄を示すことができる。

この方法は、進んだ段階で、ある事実関係を説明させる場合にもそのまま利用することができよう。たとえば、(9)と同様、中央下に「日本語」と書く場合でも、(11)では「日本語が好きになりました。」を、(12)では「日本語ができるようになりました。」を練習させることができる。



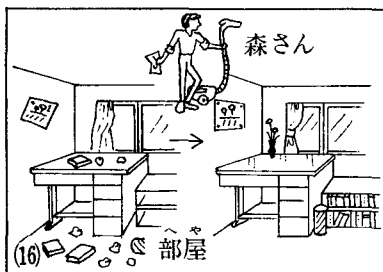
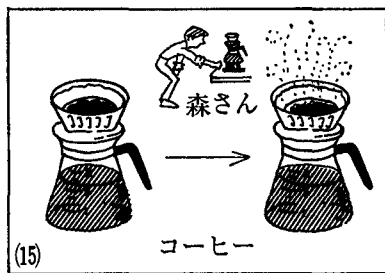
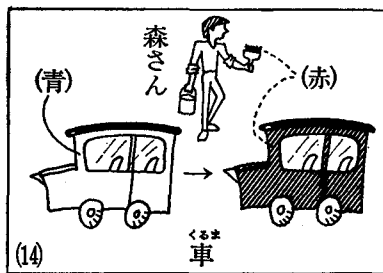
3. 今度は、同様の考え方で、(13)のような絵を考えてみよう。



絵の中央上に「森さん」と書いたり、何か象徴的な略画などを添えたりすることは、新しい約束ごとであり、変化を起こさせる動作主を示すことになる。筆者の経験では、導入段階での指導が十分に行われている場合、とくに説明を与えなくても、「森さんは……

？」と言いかけたところで学習者から「音を大きくしました。」という反応が返ってくるのが普通である。ここで「音は？」と尋ねて「大きくなりました。」が引き出せれば、全く同じ事柄を表現する場合でも視点が違えば表現形式が違ってくことを理解させるための糸口をつかんだことになる。

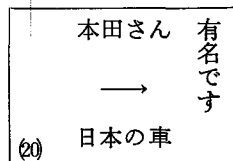
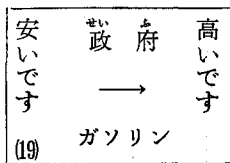
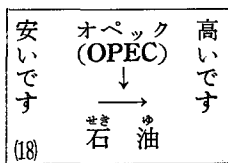
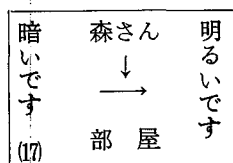
以下、同様に、(14)「森さんは車を赤くしました。」「車は赤くなりました。」



(15)「森さんはコーヒ-を熱くしました。」「コーヒ-は熱くなりました。」「森さんは部屋をきれいにしました。」「部屋はきれいになりました。」などいろいろな工夫することができる。

また、「なる」のときと同様に、練習のパターンに十分慣れたら、絵のか

わりに文字を使って図示し、以下のように発展させることも可能であろう。



(17)は「森さんは部屋を明るくしました。」、(18)は「オペックは石油を高くしました。」、(19)は「政府はガソリンを高くしました。」、(20)は「本田さんは日本の車を有名にしました。」をねらっているが、「部

屋」「石油」などを問題にした問答も可能である。また、(17)についても「誰が部屋を明るくしましたか。」という問の答は「森さんが明るくしました。」となるなど、いろいろ練習することができる。

以上、絵を使った練習問題の一例を紹介したが、実際に指導にあたる教師は、学習者と共有する環境をうまく生かして、効果的な視覚教材を作成することができるであろう。

Ⅱ. 文型練習例

これは、映画を見た後、Ⅰに示したような絵を用いた練習で「なる」「する」の基本的な意味・用法を十分理解した学習者に対して、それをさらにしっかり身につけさせ、表現力を高めるための練習の例である。学習者のもつ条件に合わせて、形式、使用語彙などを調整する必要のあることは先に述べた通りである。

A-1-a

(例) 薄い → 薄くなりました。

(1) 大きい	(10) 暗い	(18) やさしい
(2) 固い	(11) 白い	(19) 熱い
(3) 黒い	(12) 小さい	(20) 短い
(4) 青い	_____	(21) うるさい
(5) 美しい	(13) 高い	(22) 暑い
(6) いい	(14) 難しい	(23) 甘い
(7) まるい	(15) おもしろい	(24) あたたかい
(8) 明るい	(16) 安い	(25) きたない
(9) 赤い	(17) 涼しい	(26) つまらない

(注)：(1)～(12)は、映画で使われた語彙。以下同じ区切り方をする。

A-1-b

(例) { A：薄いですね。
B：ええ、ずいぶん薄くなりましたね。

- (1) 大きいですね。
- (2) 固いですね。
- (3) 黒いですね。

(A-1-a の cue に基づく)

A-2

- (例1) { A: もう朝ですね。
B: ええ、もう朝になりました。

- (例2) { A: 美しい皿ですね。
B: ええ、美しい皿になりました。

- | | |
|----------------|---------------------|
| (1) もう夜ですね。 | (8) もう11月ですね。 |
| (2) いい色ですね。 | (9) いい絵ですね。 |
| _____ | (10) にぎやかな町ですね。 |
| (3) もう12時ですね。 | (11) もう4年生ですね。 |
| (4) もう秋ですね。 | (12) いい季節ですね。 |
| (5) きれいな皿ですね。 | (13) 立派な論文ですね。 |
| (6) もう金曜ですね。 | (14) 日本的な絵ですね。 |
| (7) やさしい子供ですね。 | (15) 日本に来て、もう3年ですね。 |

A-3

- (例) { A: 静かですね。
B: ええ、ずいぶん静かになりましたね。

- | | |
|--------------|--------------|
| (1) 元気ですね。 | (8) 下手ですね。 |
| (2) きれいですね。 | (9) 不便ですね。 |
| (3) 便利ですね。 | (10) 複雑ですね。 |
| (4) 上手ですね。 | (11) 簡単ですね。 |
| (5) しょうぶですね。 | (12) 日本的ですね。 |
| (6) 有名ですね。 | (13) 単純ですね。 |
| (7) にぎやかですね。 | (14) 立派ですね。 |

A-4-a

(例) 音, 小さいです。

→音が小さくなりました。

- | | |
|-----------------|----------------------------|
| (1)音, 大きいです | (18)ガソリン, 高いです |
| (2)皿, 青いです | (19)交通, 便利です |
| _____ | (20)シャツ, きたないです |
| (3)部屋, 明るいです | (21)シャツ, きれいです |
| (4)部屋, 静かです | (22)シャツ, 白いです |
| (5)子ども, 元気です | (23)テープレコーダー, 古いです |
| (6)町, にぎやかです | (24)スープ, ぬるいです |
| (7)日本語, 上手です | (25)キャンパス, さびしいです |
| (8)辞書, きたないです | (26)文法, 複雑です |
| (9)日本語, 難しいです | (27)あの人, 好きです |
| (10)試験, やさしいです | (28)野菜, 高いです |
| (11)おそば, 好きです | (29)祖母, 元気です |
| (12)天気, いいです | (30)風邪をひいている人, 多いで
す |
| (13)目, 悪いです | (31)エンピツ, 短いです |
| (14)(お)酒, きらいです | (32)日本語の勉強, おもしろくあ
りません |
| (15)部屋, 涼しいです | |
| (16)勉強, おもしろいです | |
| (17)都合, 悪いです | |

A-4-b

(例) { A: 大きいですね。
B: ええ, 大きくなりましたね。

- | | |
|-------------|--------------|
| (1)薄いですね。 | (6)きれいですね。 |
| (2)難しいですね。 | (7)強いですね。 |
| (3)暑いですね。 | (8)つまらないですね。 |
| (4)やさしいですね。 | (9)楽しいですね。 |
| (5)美しいですね。 | (10)悲しいですね。 |

- | | |
|--------------|--------------|
| (1)にぎやかですね。 | (20)いいですね。 |
| (2)暗いですね。 | (21)もう冬ですね。 |
| (3)涼しいですね。 | (22)小さいですね。 |
| (4)明るいですね。 | (23)元気ですね。 |
| (5)もう朝ですね。 | (24)じょうぶですね。 |
| (6)あたたかいですね。 | (25)うるさいですね。 |
| (7)春ですね。 | (26)静かですね。 |
| (8)おもしろいですね。 | (27)もう夜ですね。 |
| (9)青いですね。 | (28)寒いですね。 |

B-1-a

(例) 薄い→薄くします。

cue は、A-1-a と同じものを使用

B-1-b

(例) { A: 大きいですね。
B: ええ、森さんが大きくしたんです。

- | | |
|------------|---------------|
| (1)小さいですね。 | (11)甘いですね。 |
| (2)赤いですね。 | (12)きたないですね。 |
| (3)暗いですね。 | (13)固いですね。 |
| (4)明るいですね。 | (14)あたたかいですね。 |
| (5)白いですね。 | (15)難しいですね。 |
| (6)薄いですね。 | (16)短いですね。 |
| (7)冷たいですね。 | (17)熱いですね。 |
| (8)長いですね。 | (18)濃いですね。 |
| (9)低いですね。 | (19)からいですね。 |
| (10)黒いですね。 | (20)高いですね。 |

B-1-C

(例) 音が大きい

→森さんは、音を大きくしました。

- | | |
|------------|-----------------|
| (1)音が小さい | (10)ステレオの音が小さい |
| (2)皿が大きい | (11)部屋が暖かい |
| (3)皿が固い | (12)コーヒーが甘い |
| (4)皿が青い | (13)部屋が明るい |
| (5)皿が黒い | (14)壁が白い |
| (6)部屋が暗い | (15)論文が短い |
| (7)紅茶が熱い | (16)スカートが短い |
| (8)部屋がきたない | (17)パーティーがおもしろい |
| (9)髪の毛が長い | (18)スープがからい |

B-2

(例) 部屋はきれいです、友達

→友達が部屋をきれいにしました。

- | |
|--------------------|
| (1)コップはきれいです、坂本さん |
| (2)日本の車は有名です、本田さん |
| (3)パーティーはにぎやかです、友達 |
| (4)うちは立派です、林さん |
| (5)会社は有名です、松下さん |
| (6)部屋は日本的です、ヤンさん |
| (7)話は具体的です、先生 |
| (8)私ははあわせです、両親 |

B-3-a

(例) { A: 大きいですね。
B: ええ、坂本さんが大きくしたんです。

- | | |
|-------------------|------------------|
| (1) 明るいですね。 | (16) 日本的な部屋ですね。 |
| (2) 黒いですね。 | (17) 使いやすい部屋ですね。 |
| (3) 熱いですね。 | (18) 使いやすいですね。 |
| (4) 固いですね。 | (19) 便利ですね。 |
| (5) 美しいですね。 | (20) きたないですね。 |
| (6) きれいですね。 | (21) きれいですね。 |
| (7) 有名ですね。 | (22) 読みやすいですね。 |
| (8) にぎやかですね。 | (23) おもしろいですね。 |
| (9) うるさいですね。 | (24) 具体的ですね。 |
| (10) 静かですね。 | (25) 短い話ですね。 |
| (11) 立派ですね。 | (26) 短いですね。 |
| (12) 大きいですね。 | (27) 読みやすい本ですね。 |
| (13) 大きなレストランですね。 | (28) 読みやすいですね。 |
| (14) 明るい部屋ですね。 | (29) 長いですね。 |
| (15) 日本的ですね。 | (30) 長い練習ですね。 |

B-3-b

(例) 音, 大きい

→坂本さんは、音を大きくしました。

- | |
|-----------------|
| (1) 部屋, きたない |
| (2) 皿, 青い |
| (3) 部屋, 暗い |
| (4) ステレオの音, 小さい |
| (5) コーヒー, 薄い |
| (6) 部屋, きれいだ |
| (7) 髪の毛, 短い |
| (8) 部屋, 明るい |
| (9) 壁の色, 白い |
| (10) コーヒー, 熱い |
| (11) 問題, 複雑だ |

- (12)パーティー, にぎやかだ
- (13)セーター, 緑
- (14)子供, 学者
- (15)コップ, きれいだ
- (16)自分の部屋, 子供の部屋
- (17)論文, 読みやすい
- (18)パーティー, 楽しい
- (19)子供たち, しあわせだ
- (20)ラジオの音, 大きい

C-1

(例1) 音が大きくなりました。

→音を大きくしました。

(例2) 音を大きくしました。

→音が大きくなりました。

- (1)部屋が明るくなりました。
- (2)部屋をあたたかくしました。
- (3)ビールを冷たくしました。
- (4)店が大きくなりました。
- (5)問題がやさしくなりました。
- (6)勉強する時間が短くなりました。
- (7)試験が難しくなりました。
- (8)部屋を明るくしました。
- (9)会社を有名にしました。
- (10)問題が具体的になりました。
- (11)コーヒーが冷たくなりました。
- (12)部屋をきたなくしました。
- (13)ステレオの音が大きくなりました。
- (14)試験をやさしくしました。
- (15)町をきれいにしました。

- (16)論文が読みやすくなりました。
- (17)部屋がきれいになりました。
- (18)みんなをしあわせにしました。
- (19)練習をやさしくしました。
- (20)子供が数学の教師になりました。

C-2 「なりました」か「しました」を入れて文を完成しなさい。

- (1)坂本さんは、病気に_____。
- (2)庭をきれいに_____。
- (3)日本語の勉強がおもしろく_____。
- (4)森さんの本が有名に_____。
- (5)古いうちを新しく_____。
- (6)買物が便利に_____。
- (7)5時ごろ外が暗く_____。
- (8)町が大きくにぎやかに_____。
- (9)週末にアパートをきれいに_____。
- (10)きらいなさしみが好きに_____。
- (11)豊田さんが会社を大きく_____。
- (12)オペック（OPEC）が石油を高く_____。
- (13)日本語がやさしく_____。
- (14)東京は空気が少しきれいに_____。
- (15)先週から冬休みに_____。
- (16)コーヒーを少し熱く_____。
- (17)テレビを見るのがおもしろく_____。
- (18)あの人が好きに_____。
- (19)むすめをピアノの先生に_____。
- (20)林さんの子供は先生に_____。

D-1

（例） 昼ごはんは、サンドイッチです。

→ 昼ごはんは、サンドイッチにしましょう。

- (1) 旅行は、来月です。
- (2) 場所は、東北です。
- (3) 乗り物は、新幹線です。
- (4) 出発は、朝です。
- (5) 飲み物は、ブランデーです。
- (6) 映画は、日本のです。
- (7) 音楽は、ジャズです。
- (8) 朝ごはんは、トーストです。
- (9) 会議は、来週です。
- (10) ゼミのテキストは、「日本の歴史」です。
- (11) 使う言葉は、日本語です。
- (12) メンバーは、この5人です。
- (13) ウィスキーは、サントリーです。
- (14) 会費は、500円です。
- (15) ワインは、カリフォルニアの白ワインです。
- (16) ジュースは、オレンジです。
- (17) 教科書は、この本です。
- (18) スープは、ポタージュです。
- (19) 時間は、3時からです。
- (20) 今日の練習は、ここまでです。

D-2

- (例) { A: 私はビールを飲みます。
B: そうですか。じゃあ、私もビールにします。

- (1) 私は寿司を食べます。
- (2) 私はお酒を注文します。
- (3) 私はモーツァルトを聞きます。
- (4) 私はフランス語を勉強します。
- (5) 私は新宿へ行きます。

- (6)私は中華料理を食べます。
- (7)私は赤いワインを飲みます。
- (8)私は明日行きます。
- (9)私は飛行機で行きます。
- (10)私は夜、行きます。
- (11)私はジャズを聞きます。
- (12)私は新幹線で行きます。
- (13)私はコーヒーを飲みます。
- (14)私はラーメンを食べます。
- (15)私はそばを注文します。
- (16)私は英語で書きます。
- (17)私はパンを注文します。
- (18)私は日本の映画を見ます。
- (19)私は京都へ行きます。
- (20)私はすきやきを食べます。

E-1-a

(例) クラスは9時に始まります。

→クラスは9時に始まることになっています。

- (1)車は左側を走ります。
- (2)毎週月曜日にはクイズがあります。
- (3)2学期は9月10日に始まります。
- (4)土曜日はクラスがありません。
- (5)遅刻した学生は教室に入ることができません。
- (6)冬は11月から暖房が入ります。
- (7)レポートは日本語で書かなければいけません。
- (8)家賃は月末に払います。
- (9)教室では英語を使うことができません。
- (10)森さんは来月結婚します。
- (11)JAL783便は、夜9時ごろ成田に着きます。

(12)坂本先生は今日いっしょにいません。

(13)秋、みんなで奈良へ行きます。

E-1-b

(例) { A : (あなたも) 旅行に行くんですか。

B : ええ, (結局) 行くことになりました。

ほんとうは, あまり行きたくなかったんですが…。

(1)学校を休むんですか。

(2)英語を教えるんですか。

(3)アルバイトをするんですか。

(4)お金を借りるんですか。

(5)入院するんですか。

(6)大学をやめるんですか。

(7)国へ帰るんですか。

(8)働くんですか。

(9)結婚するんですか。

(10)あなたのアパートでパーティーをするんですか。

E-2-a

(例) { A : (旅行に) 行きますか。

B : ええ, ずいぶん考えて, やっと行くことにしました。

(1)働きますか。

(2)論文を書きますか。

(3)結婚しますか。

(4)大学をやめますか。

(5)文学を専攻しますか。

(6)国へ帰りますか。

(7)日本語の先生をしますか。

- (8)大学院へ行きますか。
- (9)入院しますか。
- (10)アルバイトをしますか。
- (11)お酒をやめますか。
- (12)彼と別れますか。
- (13)日本で働きますか。

E-2-b

- (例) { A : (旅行に) 行きますか。
 B : ええ、行くことにはいますが、実は、まだはっきり決
 っていないんです。

cue は、E-1 a と同じものを使用

F-1

- (例) { A : 日本語が話せますか。
 B : ええ、前は(あまり)話せなかったんですが、このごろ、
 {(少し)}話せるようになりました。

- (1)辞書を使いますか。
- (2)テレビのニュースがわかりますか。
- (3)散歩をしますか。
- (4)日本語の新聞が読めますか。
- (5)お酒を飲みますか。
- (6)日本の映画が好きですか。
- (7)日本の小説を読みますか。
- (8)日本語で読めますか。
- (9)スポーツをしますか。
- (10)タバコをすいますか。
- (11)テレビでドラマを見ますか。

- (12) テレビのドラマがわかりますか。
- (13) 日本語の勉強はおもしろいですか。
- (14) 日本の演歌がわかりますか。
- (15) 演歌が好きですか。

F-2

(例1) 早く寝なければいけません。

→早く寝るようにしてください。

(例2) 風邪をひいてはいけません。

→風邪をひかないようにしてください。

- (1) 日本語で話さなければいけません。
- (2) 英語を使ってはいけません。
- (3) 宿題を忘れてはいけません。
- (4) 毎日、新聞を読まなければいけません。
- (5) 飲みすぎではいけません。
- (6) クラスを休んではいけません。
- (7) クラスのあと、復習しなければいけません。
- (8) 薬をきちんと飲まなければいけません。
- (9) 早くお金を返さなければいけません。
- (10) 寝坊してはいけません。
- (11) よく予習しなければいけません。
- (12) 遠慮してはいけません。

G

(例1) 皿が乾きました。→皿を乾かしました。

(例2) 皿を乾かしました。→皿が乾きました。

- | | |
|---------------|---------------|
| (1) 窓を開けました。 | (3) 車が止まりました。 |
| (2) 電気を消しました。 | (4) 色が変わりました。 |

- | | |
|------------------|-----------------|
| (5)会議が始まりました。 | (22)大学が決まりました。 |
| (6)窓が開きました。 | (23)電気がつきました。 |
| (7)電気をつけました。 | (24)会議を続けました。 |
| (8)ビールを冷やしました。 | (25)結果を出しました。 |
| (9)電気が消えました。 | (26)ビールが冷えました。 |
| (10)結果をまとめました。 | (27)仕事が進みました。 |
| (11)色を変えました。 | (28)車を止めました。 |
| (12)アパートを見つけました。 | (29)森さんが起きました。 |
| (13)会議を始めました。 | (30)電話がかかりました。 |
| (14)森さんを起こしました。 | (31)大学を決めました。 |
| (15)結果が出ました。 | (32)資料が集まりました。 |
| (16)計画を立てました。 | (33)スープが暖まりました。 |
| (17)会議が続きました。 | (34)仕事が済みました。 |
| (18)資料を集めました。 | |
| (19)電話をかけました。 | |
| (20)コーヒーを暖めました。 | |
| (21)仕事を進めました。 | |

5. 参考文献

- 池上嘉彦 1981 『『する』と『なる』の言語学』 大修館
- 石綿敏雄 1973 「自然現象を意味する動詞の用法」『ことばの研究 第四集』（『国立国語研究所論集 4』）国立国語研究所
- 井上和子 1976 『変形文法と日本語（上・下）』 大修館
- 奥津敬一郎 1967 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」『国語学 70』
- 1976 「生成文法と国語学」『岩波講座日本語 6 文法Ⅰ』岩波書店
- 金田一春彦 1957 「時・態・相および法」『日本文法講座 1 総論』明治書院
- 1959 「動詞」『続日本文法講座 1 文法各論編』明治書院
- 国立国語研究所 『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』（『国立国語研究所報告 4』）
- 1964 『分類語彙表』（『国立国語研究所資料集 6』）
- 佐久間鼎 1957 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
- 島田昌彦 1979 『国語における自動詞と他動詞』 明治書院
- 須賀一好 1980 「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学 120』
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 鈴木丹士郎 1972 「動詞の問題点」『品詞別文法講座 3 動詞』 明治書院
- 田中章夫 1978 『国語語彙論』 明治書院
- 寺村秀夫 1975 「『表現の比較』ということ」『日本語と日本語教育——発音・表現編——』文化庁・国立国語研究所
- 1976 「『ナル』表現と『スル』表現——日英『態』表現の比較——」『日本語と日本語教育——文字・表現編——』 国立国語研究所
- 西尾寅弥 1954 「動詞の派生について——自他対立の型による——」『国語学 17』

- 1964 「テイルとテアル」『講座現代語 6 口語文法の問題点』
明治書院
- 1978 「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国
語と国文学』
- 西尾実他編 1979 「品詞概説」『岩波国語辞典』第三版 岩波書店
- 1979 「語構成概説」『岩波国語辞典』第三版 岩波書店
- ノア・S・ブラネン 1967 「日本語における対をなす自・他動詞とマトリ
ックス」『国語学 70』
- 林 大 1955 「自動詞」『国語学辞典』 東京堂
- 林 四郎 1971 「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究Ⅲ』
(『国立国語研究所報告 39』)
- 三上 章 1972 (復刊)『現代語法序説』くろしお出版
- 望月世教 1944 「国語動詞に於ける対立自他の語形に就て」『国語学論
集』(橋本博士還暦記念会編)
- 森田良行 1977 『基礎日本語』 角川書店

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接尾辞「さん」「ど(度)」は、見出し語として取り上げている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立てている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。
 - 2.—4. 形容動詞は「____な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—5. 「すみません」等、慣用的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
 - 2.—6. 接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2).....のようにした。
 - 3.—1. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。((本動詞の場合))「ます形」であるか、「____て」の形であるかで下位分類し、また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。((補助動詞の場合))補助動詞が違えば下位分類してある。
 - 3.—2. 動詞「なる」「する」は、前接する品詞の違いにより下位分類してある。
 - 3.—3. 「ます」「ました」は、下接する終助詞の違いにより下位分類してある。
 - 3.—4. 助詞「に」は、その意味・用法によって、また下接する動詞が

「なる」「する」の場合はその違いによって下位分類してある。

4. 使用文例の文頭には、①②.....の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2).....と下位分類した場合も、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
5. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には()で語の使用回数を示した。

ああ(1)

- ㊤ ああ、しずかになった。

あお〔青〕(1)

- ㊦ こんないろが、くろやあおになりますか。

あおい〔青い〕(1)

- ㊨ こことここは、あおくします。

あかい〔赤い〕(2)

- ㊩ あかくなります。

- ㊪ あかくなりました。

あかるい〔明るい〕(2)

- ㊫ あかるくなります。

- ㊬ あかるくなりました。

あさ〔朝〕(1)

- ㊭ あさになりました。

いい(1)

- ㊮ いいいろになりましたね。

いち〔一〕(1)

- ㊯ これをもういちど、かまにいれます。

いる(1)

- ㊰ なにをつくっていますか。

いれる〔入れる〕(2)

- ㊱ かまに、いれます。

- ㊲ これをもういちど、かまにいれます。

いろ〔色〕(3)

- ㊳ どんないろにしますか。

- ㊴ こんないろが、くろやあおになりますか。

- ㊵ いいいろになりましたね。

うすい〔薄い〕(3)

③ うすくします。

⑥ うすくなりましたね。

⑫ うすくしました。

うつくしい〔美しい〕(2)

⑬ うつくしいさらになりましたね。

⑳ うつくしいさらになりました。

ええ(1)

⑬ ええ、なりますよ。

おおきい〔大きい〕(5)

④ おおきくします。

⑤ おおきくなりますね。

⑫ おおきくしました。

⑨ おとをおおきくしました。

⑫ おおきくなりました。

おおきな〔大きな〕(1)

⑬ おおきなおとだな。

おと〔音〕(6)

⑬ おおきなおとだな。

⑮ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

⑨ おとをおおきくしました。

⑪⑫ おとは、どうになりましたか。

⑭ おとをちいさくしました。

か(10)

① なにをつくっていますか。

⑫ どんないろにしますか。

⑮ こんないろが、くろやあおになりますか。

⑫ どうしましたか。

⑫ どんなかたちになりましたか。

㉔㉕㉖㉗㉘ どうなりましたか。

㉙ どんなさらになりましたか。

㉚ なんですか。

㉛㉜ もりさんは、なにをしましたか。

㉝㉞ おとは、どうなりましたか。

が(1)

㉟ こんないろが、くろやあおになりますか。

かたい〔固い〕(2)

㊱ ずいぶんかたくなりましたね。

㊲ かたくなりました。

かたち〔形〕(1)

㊳ どんなかたちになりましたか。

かま〔簾〕(2)

㊴ かまにいます。

㊵ これをもういちど、かまにいます。

かわかす〔乾かす〕(1)

㊶ かわかします。

ください〔下さい〕(1)

㊷ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

くらい〔暗い〕(2)

㊸ くらくなります。

㊹ くらくなりました。

くろ〔黒〕(2)

㊺ くろにします。

㊻ こんないろが、くろやあおになりますか。

ここ(2)

㊼ こことここは、あおくします。

㊽ こことここは、あおくします。

これ(1)

- ⑩ これをもういちど、かまにいれます。

こんな(1)

- ⑮ こんないろが、くろやあおになりますか。

さら(6)

- ② さらです。
⑦ さらになりましたね。
⑮ うつくしいさらになりましたね。
⑳ まるいさらになりました。
㉑ どんなさらになりましたか。
㉒ うつくしいさらになりました。

さん(3)

- ⑤ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。
⑨⑬ もりさんは、なにをしましたか。

しずかな〔静かな〕(2)

- ⑤ ああ、しずかになった。
⑦ しずかになりました。

しろい〔白い〕(1)

- ⑫ しろくなりました。

ずいぶん〔随分〕(1)

- ⑪ ずいぶんかたくなりましたね。

すこし〔少し〕(1)

- ⑤ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

すみません(1)

- ⑤ すみません。

する(10)

- (1)⑨⑬ もりさんは、なにをしましたか。
(2)⑫ どんないろにしますか。

⑬ くろにします。 くろにします。黒く染めます。

⑭ どんなかたちにしましたか。 どんなかたちにしましたか。どんな形にしましたか。

⑮ まるいさらにしました。 まるいさらにしました。丸いさらにしました。

(3)③ うすくします。 うすくします。薄くします。

④ おおきくします。 おおきくします。大きくします。

⑤ こことここは、あおくします。 こことここは、あおくします。こことここは、青く染めます。

⑥ うすくしました。 うすくしました。薄くしました。

⑦ おおきくしました。 おおきくしました。大きくしました。

⑧ ちいさくします。 ちいさくします。小さくします。

⑨ おとをおおきくしました。 おとをおおきくしました。おとを大きくしました。

⑩ おとをちいさくしました。 おとをちいさくしました。おとを小さくしました。

(4)⑪ どうしましたか。 どうしましたか。どうしましたか。

(5)⑫ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。 もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。もりさん、おとをもう少し小さくしてください。

だ(1) だ(1) どうですか。どうですか。

⑬ おおきなおとだな。 おおきなおとだな。大きなおとだね。

ちいさい〔小さい〕(4)

⑭ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。 もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。もりさん、おとをもう少し小さくしてください。

⑮ ちいさくします。 ちいさくします。小さくします。

⑯ おとをちいさくしました。 おとをちいさくしました。おとを小さくしました。

⑰ ちいさくなりました。 ちいさくなりました。小さくなりました。

つくる〔作る〕(1) つくる〔作る〕(1) どうですか。どうですか。

① なにをつくっていますか。 なにをつくっていますか。なにを作っていますか。

です(2) です(2) どうですか。どうですか。

② さらにです。 さらにです。さらにです。

③ なんですか。 なんですか。なんですか。

と(1) と(1) どうですか。どうですか。

④ こことここは、あおくします。 こことここは、あおくします。こことここは、青く染めます。

ど〔度〕(1) ど〔度〕(1) どうですか。どうですか。

⑪⑦ これをもういちど、かまにいれます。

どう(8)

⑫⑩ どうしましたか。

⑫⑭⑮⑯⑰ どうになりましたか。

⑲⑳ おとは、どうになりましたか。

どんな(3)

⑳⑫ どんないろにしますか。

㉑⑬ どんなかたちにしましたか。

㉒⑭ どんなさらになりましたか。

な(1)

㉓⑮ おおきなおとだな。

なに〔何〕(4)

(1)① なにをつくっていますか。

㉔② もりさんは、なにをしましたか。

(2)④ なんですか。

なる⑧

(1)⑥ ええ、なりますよ。

(2)⑦ さらにになりましたね。

⑮⑩ こんないろが、くろやあおになりますか。

⑮⑪ うつくしいさらになりましたね。

⑮⑫ いいいろになりましたね。

㉒⑬ どんなさらになりましたか。

㉒⑭ うつくしいさらになりました。

㉒⑮ あさになりました。

㉒⑯ よるになりました。

(3)⑤ おおきくなりますね。

⑥ うすくなりましたね。

⑪⑦ ずいぶんかたくなりましたね。

- ㉔ かたくなりました。
- ㉕ あかるくなります。
- ㉖ あかくなります。
- ㉗ くらくなります。
- ㉘ あかるくなりました。
- ㉙ あかくなりました。
- ㉚ くらくなりました。
- ㉛ しろくなりました。
- ㉜ おおきくなりました。
- ㉝ ちいさくなりました。
- (4)㉞ しずかになりました。
- (5)㉟㊱㊲㊳㊴ どうになりましたか。
- ㊵㊶ おとは、どうになりましたか。
- (6)㊷ ああ、しずかになった。
- に(15)
- (1)㊸ かまにいます。
- ㊹ これをもういちど、かまにいます。
- (2)㊺ さらにになりましたね。
- ㊻ こんないろが、くろやあおになりますか。
- ㊼ うつくしいさらにになりましたね。
- ㊽ いいいろになりましたね。
- ㊾ どんなさらにになりましたか。
- ㊿ うつくしいさらにになりました。
- ㊽ あさになりました。
- ㊽㊽ よるになりました。
- (3)㊽ どんないろにしますか。
- ㊽ くろにします。
- ㊽ どんなかたちにしましたか。

㉔ まるいさらにしました。

ね(6)

⑤ おおきくなりますね。

⑥ うすくなりましたね。

⑦ さらにしましたね。

⑪ ずいぶんかたくなりましたね。

⑬ うつくしいさらにしましたね。

⑮ いいいろになりましたね。

は(5)

⑭ こことここは、あおくします。

④⑨ もりさんは、なにをしましたか。

⑤⑤ おとは、どうになりましたか。

ました(34)

(1)②① うすくしました。

②② おおきくしました。

②④ まるいさらにしました。

②⑥ かたくなりました。

②⑧ うつくしいさらにしました。

③⑩ あさになりました。

③③④⑩ よるになりました。

③⑤ あかるくなりました。

③⑦ あかくなりました。

③⑨ くらくなりました。

④② しろくなりました。

⑤⑩ おとをおおきくしました。

⑥② おおきくなりました。

⑥④ おとをちいさくしました。

⑥⑥ ちいさくなりました。

⑤⑦ しずかになりました。

(2)②⑩ どうしましたか。

②③ どんなかたちになりましたか。

②⑤③④⑥⑧⑩ どうになりましたか。

②⑦ どんなさらになりましたか。

④⑨⑤③ もりさんは、なにをしましたか。

⑤⑩⑤⑤ おとは、どうになりましたか。

(3)⑥ うすくなりましたね。

⑦ さらにになりましたね。

⑪ ずいぶんかたくなりましたね。

⑬ うつくしいさらになりましたね。

⑮ いいいろになりましたね。

ます(17)

(1)③ うすくします。

④ おおきくします。

⑧ かわかします。

⑨ かまにいれます。

⑩ やきます。

⑬ くろにします。

⑭ こことここは、あおくします。

⑰ これをもういちど、かまにいれます。

⑲ あかるくなります。

⑳ あかくなります。

㉒ くらくなります。

㉔ ちいさくします。

(2)① なにをつくっていますか。

⑫ どんないろにしますか。

⑮ こんないろが、くろやあおになりますか。

(3)⑤ おおきくなりますね。

(4)⑩ ええ、なりますよ。

まるい〔円い〕(1)

②④ まるいさらにしました。

もう(2)

①⑦ これをもういちど、かまにいれます。

④⑤ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

もり〔森〕(3)

④⑤ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

④⑨⑤③ もりさんは、なにをしましたか。

や(1)

①⑤ こんないろが、くろやあおになりますか。

やく〔焼く〕(1)

①⑩ やきます。

よ(1)

①⑥ ええ、なりますよ。

よる〔夜〕(2)

③⑨④⑩ よるになりました。

を(7)

① なにをつくっていますか。

①⑦ これをもういちど、かまにいれます。

④⑤ もりさん、おとをもうすこしちいさくしてください。

④⑨⑤③ もりさんは、なにをしましたか。

⑤⑩ おとをおおきくしました。

⑤④ おとをちいさくしました。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「うつくしい さらに になりました」——「なる」「する」——
企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16%EKカラー・スタンダード
巻 数 全一卷
上映時間 5分
現 像 所 東洋現像所
録 音 アオイスタジオ
完 成 昭和51年3月31日

制作スタッフ

制 作	神 崎 晴 之	脚 本	前 田 直 明
演 出	前 田 直 明	演出助手	辛 島 徹 夫
撮 影	相 良 国 康	撮影助手	市 川 哲 雄
照 明	伴 野 功	音 楽	吉 田 征 雄
録 音	堀 内 戦 治 (アオイスタジオ)		
ネガ編集	亀 井 正		

配 役

(PART1) 陶工 (声)	三 田 松五郎
見学者 (男) (声)	八 木 光 生
〃 (女) (声)	中 村 恵 子
質問者 (男)	内 山 彰 夫
答える人 (女)	大 方 斐紗子
(PART2) 質問者 (男)	内 山 彰 夫
答える人 (女)	大 方 斐紗子
(PART3) 森 (学生)	森 亮 輔
坂本 (学生)	斎 藤 譲 一
質問者	内 山 彰 夫
答える人	大 方 斐紗子

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	サブ・タイトル うつくしいさらに なりま した ——「なる」「する」—— (PART 1)	
3	見学者A・Bの歩き ロング	
4	ろくろの前 見学者と陶工、ろくろを回そ うとしている、移動 Z・U	A「①なにをつくっています か。」
5	ろくろを回す手もと	陶工「②さらです。」 「③うすくします。」 「④おおきくします。」
5	変化していく粘土	B「⑤おおきくなりますね。」
6	さらの形、ほぼ整う できばえをみる陶工	A「⑥薄くなりましたね。」 B「⑦さらになりましたね。」
7	乾燥場、器が並んでいる 器を運んでくる	陶工「⑧かわかします。」 陶工「⑨かまにいれます。 ⑩やきます。」
8	窯入れ、炎	
9	焼きあがったさら A、それをはじいてみて	A「⑪ずいぶんかたくなりま したね。」
10	うわぐすり液にさらをつける	B「⑫どんないろにします か。」
11	ひしゃくでさらにうわぐすり をかける	陶工「⑬くろにします。」 「⑭こことここは、あおく します。」
12	うわぐすりをかけたさら	B「⑮こんないろが、くろや あおになりますか。」

- 13 炎
- 14 できあがったさら
- 15 タイトル
一れんしゅう一
- 16 陶工, 粘土をうすくしていく,
手もと Z・B
- 17 ろくろ上のさら, 形が変化し
ていく
- 18 ろくろ上のさら O・L 炎
焼きあがったさら
- 19 着色してあるさら (部分)
F 移動, できあがったさら
(部分)
できあがったさら

F・O

- (PART 2)
- 20 夜明け前から明るくなるまで
(コマ撮り)画面, 朝のふんい
きから次第に真っ白になる
- 21 画面, 夕方から夜まで
(コマ撮り)
- 街燈がともって
- 22 タイトル
一れんしゅう一
- 23 夜明け (コマ撮り)

陶工「⑩ええ, なりますよ。」

陶工「⑪これをもういちど,
かまにいれます。」

B「⑫うつくしいさらになり
ましたね。」

A「⑬いいいろになりました
ね。」

Q「⑭どうしましたか。」

A「⑮うすくしました。

⑯おおきくしました。」

Q「⑰どんなかたちにしまし
たか。」

A「⑱まるいさらにしました。」

Q「⑲どうなりましたか。」

A「⑳かたくなりました。」

Q「㉑どんなさらになりまし
たか。」

A「㉒うつくしいさらになり
ました。」

㉓あかるくなります。

㉔あさになりました。

㉕あかくなります。

㉖くらくなります。

㉗よるになりました。

Q「㉘どうなりましたか。」

	夕焼け（コマ撮り）		A「㉔あかるくなりました。」
	夕やみせまる（コマ撮り）		Q「㉔どうになりましたか。」
			A「㉔あかくなりました。」
			Q「㉔どうになりましたか。」
			A「㉔くらくりました。
			㉔よるになりました。」
24	富士山のスチール Z・U 富士山のスチール Z・B （PART 3）		Q「㉔どうになりましたか。」
25	寮，坂本の部屋，隣の部屋から突然大きな音が聞こえてくる。勉強中の坂本，立ちあがって行く	坂本「㉔おおきなおとだな。」	
26	森の部屋をノックする坂本 ドアをあける森	森「㉔なんですか。」 坂本「㉔もりさん，おとをも うすこしちいさくして ください。」 森「㉔すみません。 ㉔ちいさくします。」	
27	ステレオのボリュームを下げる森		
28	坂本の部屋 音，静かになる 戸外を眺める坂本	坂本「㉔ああ，しずかになった。」	
29	タイトル 一れんしゅう一		
30	森の部屋 ステレオのボリュームをまわす小→大	Q「㉔もりさんは，なにをしましたか。」 A「㉔おとをおおきくしました。」	
31	坂本の部屋，勉強中の坂本，音，急に大きくなる。	Q「㉔おとは，どうになりましたか。」	

32	森の部屋, ボリュームをまわす 大→小	A「㉔おおきくなりました。」 Q「㉕もりさんは, なにをしましたか。」 A「㉖おとをちいさくしました。」
33	森の部屋, 音小さくなってきえる	Q「㉗おとは, どうになりましたか。」 A「㉘ちいさくなりました。」 ㉙しずかになりました。」
34	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル	

F・O

日本語教育映画解説15

うつくしい さらに なりました

——「なる」「する」——

昭和57年3月

国 立 国 語 研 究 所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 東京(900) 3111(代表)